










2019年度

活動報告書

Tokai University Student Project Center Activity Report

東海大学チャレンジセンター

2019年度チャレンジセンター
活動報告書の発行にあたって



チャレンジセンター　センター長
岡田 工

日頃より東海大学チャレンジセンターの活動にご理解、ご協力ありがとうございます。2006年に東海大学の建学の精神のもと、学生の社会的実践力を育成するチャレンジセンターを発足し、2020年3月で14年間にわたる教育活動を継続することが出来ました。これまでに、ご支援をいただきました皆様には一方ならぬご厚情を賜り、お礼申し上げます。

チャレンジセンターのプロジェクト活動では、学部・学科・学年の枠をこえ、「地域活性」「社会貢献」「国際交流」「ものつくり」「環境・動植物保護」など多様な分野で活動しています。また、直面する様々な課題を乗り越える体験を通じて社会的実践力を培います。2019年度のプロジェクトは、20件のチャレンジプロジェクトと20件のユニークプロジェクトが活動しており、全国5キャンパスで1535名の学生がプロジェクトに参加しています。

チャレンジプロジェクトは、学生が提案する企画に、仲間を集め（参加人数が30名以上（湘南キャンパス以外は20名以上））、1年間を通して活動するものです。また、大学職員によるプロジェクトコーディネーターと教員によるプロジェクトアドバイザーがサポートしています。

ユニークプロジェクトは、少人数のグループ（10名以上）でプロジェクトを企画し、将来的にチャレンジプロジェクトとして発展することを目的とした萌芽的位置づけのプロジェクトです。学生の希望でプロジェクトコーディネーターやプロジェクトアドバイザーを付けることが可能です。

2018年度より「パブリック・アチーブメント(PA)型教育」として発展教養科目（「シチズンシップ」「ボランティア」「地域理解」「国際理解」）を開講しました。市民としての教養につながる導入的な授業を1年生の必修科目として開講し、実践的な活動としてチャレンジセンターのプロジェクトが位置づけられています。

2020年春より世界的に感染が広がった新型コロナウイルス感染症の影響を受け、現在、プロジェクト活動は制限されております。今後、感染症予防対策を強化したり、新たな活動の場となるインターネットを活用したり、慎重にかつ安全に活動を進めていきたいと考えております。

今後も本センターは、プロジェクト活動を通じて学生の社会的実践力を伸ばすサポートを進めていきますので、チャレンジセンターの活動にご意見、ご協力をいただきますようよろしくお願いします。

2020年10月

INDEX

2019年度チャレンジセンター ……1
活動報告書の発行にあたって
チャレンジセンターの取り組み ……3
研修会 ……4
チャレンジプロジェクト活動報告 ……5
【湘南キャンパス】 病院ボランティアプロジェクト ……5
スポーツ社会貢献プロジェクト ……7
サイエンスコミュニケーター ……9
キャンパスストリートプロジェクト ……11
Tokai Formula Club ……13
ライトパワープロジェクト ……15
東海大学学生ロケットプロジェクト ……17
Tokai International Communication Club ……19
3.11生活復興支援プロジェクト ……21
DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト ……23
Beijo Me Liga ……25
Tokai Dream Space Team ……27
Sunflower ……29
【高輪キャンパス】 Takanawa共育プロジェクト ……31
【熊本キャンパス】 先端技術コミュニティACOT ……33
メカトロマイスタープロジェクト ……35
阿蘇援農コミュニティープロジェクト ……37
阿蘇は箱舟プロジェクト ……39
あにまるれすきゅープロジェクト ……41
【札幌キャンパス】 札幌ボランティアプロジェクト ……43
ユニークプロジェクト活動報告 ……45
ものつくり館訪問団体 ……45
チャレンジセンターの活動 ……46
チャレンジセンター長賞受賞者 ……46

チャレンジセンターは
社会が求める4つの力を育む成長の場です。



自ら考える力
対象を見据え、その本質を掘り下げ
可能性を広げる力

集い力
多様な人々の中で生き、
その集団の形成、維持に寄与する力

挑み力
困難な問題に主体的に向き合い、
解決・達成に向け踏み出す力

成し遂げ力
目標達成の途中で生じる失敗や
挫折を乗り越えて、目標に近づく力



**社会的実践力を身につけ、
高い専門性で社会に貢献できる人材**

チャレンジセンターの取り組み

チャレンジセンターでは、学生たちがより大きな目標を成し遂げられるように、様々な面できめ細かく支援します。委員会やプロジェクト協議会を通じて、組織内での情報交換や連携を図るとともに、プロジェクト活動の質を高めるための人的な支援として、各プロジェクトに原則として本学の教職員から選抜されたプロジェクトコーディネーターおよびプロジェクトアドバイザーを配置するなど、安心して活動に取り組むことができるサポート体制を整えています。

チャレンジセンター運営委員会

チャレンジセンター運営に関連した部長などで構成され、実行委員会での協議を踏まえ、
本センターの運営全体について最終的な審議をします。

チャレンジセンター実行委員会

チャレンジセンターの活動に関連した課長などで構成され、プロジェクトが活動するにあたり
必要な環境整備等、実務的な内容を審議します。

プロジェクト協議会

プロジェクト活動を円滑に推進するため、プロジェクト間の情報交換、本センターからの連絡事項の伝達を行う場として、プロジェクト代表者の出席を義務付け、原則として月1回開催します。今年度は全9回開催し、全キャンパスをTV会議システムで接続して実施しました。

チャレンジセンター組織

現代教養センター	チャレンジセンター
所長 成川忠之教授	センター長 岡田工教授

プロジェクトコーディネーター

プロジェクト全体の進行状況を把握し、活動全般の相談役や提出書類の作成指導を担います。また、予算管理・工程管理に関する指導や、活動が困難な状況の時に円滑に進むよう学生にモチベーションを与える「縁の下の力持ち」としての役割を担っております。なお、コーディネーターは本センターが実施する複数の研修会の受講が義務づけられており、これは東海大学人事制度において「業務別研修」と位置づけられたオリジナルのSD（Staff Development）活動です。

プロジェクトアドバイザー

専門的知識または技能を持った教員が担当し、各プロジェクトに1名以上配置されます。主な役割として、プロジェクト活動に対して専門的な立場から指導・助言を行います。プロジェクトの活動をより質が高く大きなチャレンジとするためには、プロジェクトアドバイザーの豊富な知識と経験に裏付けられたアドバイスが必要になります。

支援　支援　支援

プロジェクト活動

学部・学科・学年の枠を越えた学生たちがチームならではの目標を掲げ、自主的および創造的に地域活性、国際交流、ものつくりなどの企画を行うことで社会的実践力を体得していきます。

チャレンジプロジェクト

◆学生が自由な発想で企画・立案した年間を通じたプロジェクト活動
◆プロジェクトコーディネーター、プロジェクトアドバイザーを配置
◆メンバーが複数学科に横断して構成されていること
◆参加人数が30名以上であること（湘南キャンパス以外は20名以上）

【プロジェクト修了認定】
チャレンジプロジェクトがチームとしての条件を満たし、かつプロジェクトコーディネーターによって1年間の活躍が評価されたプロジェクトメンバーには修了認定証が授与されます。

ユニークプロジェクト

◆将来的にチャレンジプロジェクトとして発展することを目的とした萌芽的位置づけのプロジェクト
◆少人数のグループ（10名以上）で構成
◆学生からの希望があり、かつ人員が配置できる場合はプロジェクトコーディネーターとプロジェクトアドバイザーを配置

研修会

リーダー研修会

キャンパスをこえたプロジェクト学生同士の交流および“プロジェクトリーダー”の育成を通じて、
プロジェクト活動の活性化を目的に実施。

2020年2月19日～21日「2019年度チャレンジセンターリーダー研修会」を実施

ねらい：プロジェクトリーダーとしてメンバーを統率し、プロジェクト目標を達成するために必要な力を育む
○リーダーとしての課題を捉え、リーダーシップとは何かを考える
○リーダーに必要なスキルとして、ファシリテーションを学ぶ
○リーダーとしての目標を考え、表明する

期　　間：2020年2月19日（水）～2月21日（金）
実施場所：湘南校舎19号館2階オープンマルチアトリエ
宿泊場所：湘南校舎クラブハウス
参 加 者：学生38名（チャレンジプロジェクト（19）各2～3名）
講　　師：岡田工（チャレンジセンター長）
　　二ノ宮リムさち（現代教養センター准教授）
　　村松香織（現代教養センター准教授）
　　池谷美衣子（現代教養センター講師）
　　黒崎岳大（現代教養センター講師）
　　下田奈祐（3.11生活復興支援プロジェクト・初代リーダー）


▶ 岡田センター長による講義

コーディネーター・アドバイザー研修会

プロジェクト支援に活用できるスキル向上を目的とした研修や意見交換会をTV会議システムを活用し実施。特にプロジェクトコーディネーターに対する研修は、多様な学生の成長に応じられるよう、職員が「教育の担い手」である認識を深める本センター独自のSD。

開催	研修名	テーマ・内容	講師	参加人数
2019年4月19日	プロジェクト コーディネーター 事務研修	●チャレンジセンターの教育プログラムとは ●プロジェクトコーディネーターの役割・支援業務 ●予算の留意事項について	岡田工（チャレンジセンター長） 曽我研郎（チャレンジセンター課長）	29
2019年 5月24日・25日	プロジェクト コーディネーター 能力研修	●任命式 ●2018年度リーダー研修会報告 ●プロジェクトにとってミーティングの位置、ミーティングの改善のためにプロジェクトコーディネーターができること ●アクションプランの作成	山下豪紀（事務部長） 村井健太郎（チャレンジセンター） 池谷美衣子（現代教養センター講師） 曽我研郎（チャレンジセンター課長）	14
2019年6月26日	プロジェクトアドバイザー ミーティング	●チャレンジセンターの教育プログラムとは ●プロジェクトコーディネーター能力研修報告 ●プロジェクトと学科の連携について ●意見交換	岡田工（チャレンジセンター長） 池谷美衣子（現代教養センター講師） 吉永昌史（動力機械工学科講師、Tokai Formula Clubアドバイザー） 長田和也（現代教養センター助教）	10
2019年11月18日	プロジェクト コーディネーター 中間研修	●中間研修にあたって ●プロジェクトコーディネーターの半年を振り返る ●プロジェクト学生の意見を聴く ●今後の活動について考える	成川忠之（現代教養センター所長） 長田和也（現代教養センター助教） 林 瑞葵（元DAN DAN DANCE＆SPORTSプロジェクトリーダー） 長田達也（元ライトパワープロジェクトリーダー） 長田和也（現代教養センター助教）	20
2020年2月18日	プロジェクト コーディネーター・ アドバイザー意見交換会	教職共同のための工夫と課題 -事前アンケートの結果から-	高梨宏子（現代教養センター講師）	33

チャレンジプロジェクト活動報告

病院ボランティアプロジェクト

湘　南

達成目標　患者さんやイベント参加者の声をよく聴き、
今ある企画のクオリティ向上と新たな企画への視野を広げる

学びのテーマ　患者さんに話しかける力を身につける

リーダー	高橋悠河	工学部電気電子工学科	2年
サブリーダー	尾崎将	工学部医用生体工学科	2年
サブリーダー	吉田早紀	教養学部芸術学科音楽学課程	3年
広報リーダー	小沢新夏	法学部法律学科	2年
会計	森岡成	文化社会学部心理社会学科	1年
コーディネーター	佐藤多嘉雄	医学部付属病院健診センター	
アドバイザー	池村明生	教養学部芸術学科デザイン学課程	

（参加人数　34名）

❶ 活動概要

病院で入院生活を送る患者さんの中には、今までの生活から分断された生活に戸惑いを覚え、不安やストレスを感じている人もいる。病院ボランティアプロジェクトはそんな不安を抱えた患者さんの心を少しでも緩和するために活動をしている。本プロジェクトの主な活動は病棟でのボランティア活動である。また、病院内でコンサート等のイベントを企画し、医療セミナーや絵本読み聞かせ会といった地域の方々を対象とした活動も行っている。



▶ 病棟活動のオリエンテーション

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

私たちは今年度達成目標として「患者さんやイベント参加者の声を良く聴き、今ある企画のクオリティ向上と新たな企画への視野を広げる」を掲げて活動した。この達成目標は、昨年度の達成目標である「患者さん達のお話を聞くことに力を入れたい。」に対して、その活動結果は、積極的にコミュニケーションを取りにいけず、受動的にしか患者さんのお話を聞く機会がなかった。ただ受け身の会話で`聞く`のではなく、私たちが話しかけてその相手の想い・心境を汲み取って`聴く`ことが本来のあるべきコミュニケーションであり、不安要素の緩和につながると考えた。また、汲み取って聴いたニーズを「例年行っている企画のクオリティを向上させること」、「新しい企画を生み出すこと」の２点に具体的に反映させることでプロジェクトの発展を視覚化できるようにした。病棟活動では、活動マニュアルを見直し、メンバーが患者さんとより楽しいコミュニケーションを取れるように、楽しい気分になる話題や不快にさせかねない話題を確認し合った。その結果、積極的に患者さんに話しかけ、コミュニケーションを取ることが出来た。また、今年度は病棟活動を行っている小児科病棟の患者さんを対象にした夏祭りに出店し、患者さんたちに夏の季節感を味わってもらえた。医療セミナーでは、昨年度のアンケートから大きな病気ではなく、健康習慣などの健康知識についての講演を望んでいることを汲み取った。さらに知識だけではなく、会場内で実技を行うことが求められていることを知り、実技有の講演を企画した。院内コンサートでも、入院患者さんから「若い人が頑張っている姿が励みになる。」と聴き、講演団体の選定に配慮した。絵本製作では今年度、未病のために重要となるがなかなか履行することが難しい「手洗い」をテーマとして楽しく読める工夫も散りばめて絵本を製作した。園児と直に接して次回作のヒントを集めながら製作した絵本で知識を伝える絵本読み聞かせ会ではミーティング中に練習する時間を設けて絵本を手に持つ角度や表情を確認することで子どもたちの集中が他に向かわないように工夫した。ただ、幼児たちを前にすると練習成果がうまく発揮されず、絵本の読み込み不足や当日の段取りの甘さを痛感した。今年度の活動において上記の様に患者さんのお話を聴くために「患者さんに話しかける力を身に着ける」必要があり、これを学びのテーマとした。そのため活動中に患者さんに話しかける（１方向）ことはできるようになったが、相手の気持ちを汲み取ってのコミュニケーション（双方向）が取れるまでは至らなかった。経験を積み上げて人間性を豊かにしていくことの重要性を痛感した。

上記の様に各種企画において昨年度の意見を元に汲み取ったニーズを元にクオリティを向上させ、参加者に楽しんでいただけた。また、今年度は例年行っていた大磯癒しのイベントが先方の都合により中止となったが、新しい形の企画として七沢病院でのイベントを行い、病院スタッフの方々と協力して患者さんたちに非日常的な空間を楽しんでいただけた。今年度の活動を通じて患者さん達とのコミュニケーションを取ることでの不安要素の緩和には、話を聴き、相手の立場に立って一人ひとりに合わせた心配りをすることの大切さを知った。また、そのためにも私たちは「周囲に目を配り、思いやりを持てる人」に成長していく必要を強く感じた。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	病棟活動	本学医学部付属病院にてボランティア活動を行った。春セメスターは5月から7月まで開催。合計10名のメンバーが3病棟に分かれ活動した。
6	絵本読み聞かせ会	近隣の保育園・幼稚園に訪問し、子どもたちに医療や病気、健康についての知識を絵本を通じて伝える企画。本学付属本田記念幼稚園や大根幼稚園にて活動をした。
8	小児科病棟夏祭り	本学医学部付属病院にて小児科病棟の患者さんを対象にした夏祭りに「射的」の屋台として参加した。
9	七沢イベント	AOI七沢リハビリテーション病院にて本学の落語研究部、ジャグリングサークルSTANDの協力の元、患者さんに楽しんでいただく各種演目を披露した。
10	病棟活動	本学医学部付属病院にてボランティア活動を行った。秋セメスターは10月から12月まで開催。合計8名のメンバーが3病棟に分かれ活動した。
11	ホームカミングデーでの紙芝居	ホームカミングデーに来場された親子連れの方向けに紙芝居の読み聞かせを行った。紙芝居の中には本プロジェクトが作成した絵本を紙芝居に変えたものも含めた。
12	院内コンサート	本学医学部付属病院にて、入院されている患者さん達に、季節感のあるコンサートを開催する企画。冬や星空などの曲をはだのユーフォニアム響奏連、ガールスカウト神奈川県第33団の2団体に演奏していただいた。
2	医療セミナー	地域にお住まいの住人の方々を対象に、医療の知識や病気の予防法などを知っていただくことを目的にした企画。テーマは「フレイル」。メンバーは当日の運営を担当した。



▶ 絵本読み聞かせ会 本田記念幼稚園



▶ 七沢イベント



▶ 院内コンサート



▶ 医療セミナー

❹ 協力団体

本学医学部付属病院、本学医学部付属大磯病院、AOI七沢リハビリテーション病院、認定こども園本学付属本田記念幼稚園、大根幼稚園、湘南シーウィンドアンサンブル、はだのユーフォニアム響奏連、公益社団法人ガールスカウト神奈川県連盟第33団、本学文化部連合会落語研究部、本学ジャグリングサークルSTAND、本学教養学部芸術学科デザイン学課程２年生 古久保葵 ・川島萌弥、株式会社タウンニュース社

❺ メディア掲載・放映

なし

スポーツ社会貢献 プロジェクト

湘　南

達成目標　一人ひとりが持つスポーツの価値観を知り、スポーツの良さを地域社会に広げる

学びのテーマ　スポーツの多様な価値観を学ぶ

リーダー	山城洸陽	体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科	3年
サブリーダー	城下和樹	体育学部体育学科	3年
サブリーダー	白井雪菜	体育学部生涯スポーツ学科	3年
広報リーダー	清水美沙紀	工学部生命科学科	3年
会計	鶴田将大	文学部歴史学科日本史専攻	3年
コーディネーター	大塚耕祐	チャレンジセンター	
アドバイザー	荻裕美子	体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科	

（参加人数　87名）

❶ 活動概要

当プロジェクトは、東海大学周辺の地域である伊勢原市、秦野市、平塚市在住の幼児から高齢者までの幅広い世代を対象としたスポーツイベントの企画、運営を行っている。より多くの人がスポーツに触れ、笑顔になれるような機会を創り出していくことを目的とする。また、イベントを通じて人と人との繋がりを感じてもらい、健康に対する意識やコミュニケーション能力の向上を目指す。スポーツの持つ良い価値を広めることで社会貢献をしたいと考えている。



▶ 東海スポーツDAY 集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

今年度、当プロジェクトは「一人ひとりが持つスポーツの価値観を知り、スポーツの良さを地域社会に広げる」を達成目標とし、「スポーツの多様な価値観を学ぶ」を学びのテーマとして設定し活動してきた。東海大学周辺に在住する幼児から高齢者といった幅広い世代を対象としてスポーツイベントの提供をしていく中で、各イベントの対象者となる参加者が求めるニーズを考え、企画、運営を行ってきた。また今年度は例年にない新しいイベントを取り入れることでプロジェクトとして成長することができた。スポーツの良さとは、人と人との繋がり、健康の保持増進や喜びなど多様であると考える。そのようなものを感じてもらえるようなプログラムを参加対象に合わせて企画した。例えば、未就学児と保護者を対象とした「ニコニコ教室」では、安全面に配慮し、シンプルなルールで楽しめる遊びを提供することで、親子間、親同士の交流や地域コミュニティの広がりを感じられるイベントとなった。また、高齢者を対象に行われる「ノルディックウォーキング教室」では、学生との交流を楽しみながら歩くイベントであることから、地域の方々と大学生が一緒に体を動かすことによって繋がることができ、さらに参加者が健康に対して意識するきっかけを提供することができた。「第12回東海スポーツDAY」では、「普段接することの少ない他の小学校の児童、他学年や大学生との交流の場とする。また、2020年夏に東京オリンピック・パラリンピックが開催されるため、当イベントを通じてさらに興味、関心を持って貰う」ことを目的とし、テーマを「体験！挑戦！発見！2020」とした。参加者へのアンケートにて、テーマに沿った質問として「スポーツの持つ力は何だと思いますか？」と参加者の子どもたちに質問をしたところ、「楽しめる」「友達を作ることができる」「協力する」などといった回答が得られた。このことから、当プロジェクトが掲げる「スポーツの良さを伝える」といった目標を達成できたのではないかと考える。また当イベントでは種目や装飾でオリンピック・パラリンピックを感じられるように工夫したため、スポーツDAYに関わった人に今夏行われる東京オリンピック・パラリンピックに更なる興味、関心を持つ機会を提供することができたのではないかと感じる。このようなスポーツの持つ力をさらに多くの方に感じてもらうために、広報活動において例年のチラシの配布、SNSの活用に加えてホームページ更新や、昨年度に続きリーフレットの作成を行った。当プロジェクトの認知度向上を図ると同時に、イベントを知ってもらい、沢山の方に参加してもらう事で地域社会へと広げることができたと考える。またイベントの開催に当たり参加者のニーズを考えたり、イベント開催中の参加者の笑顔や他学年、大学生との交流を体験することで、スポーツの持つ良さを多く感じられた。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	秦野市子どもまつり	秦野市主催のイベントで、当プロジェクトはなんでもボーリングや、どうぶつ親子などのブースを開いた。また、ある時間ではパラバルーンや三色鬼ごっこを開き、何度来ても楽しめるブース作成に力を入れた。
6	ニコニコ教室	1～2歳児とその親御さん対象に、パラバルーンやお菓子競争などを行い、普段できないような遊びを体験してもらうことを目的とした。また大学生との交流も含め、コミュニケーションを深めた。
7	でかスポ杯	東海大学チャレンジセンタープロジェクト間の交流を目的としたもので、ポートボールや障害物競走などでスポーツの楽しさを広めつつ、プロジェクト間のチームワークも高めることができた。
8	大久保育成会 夏のレクリエーション ミニ運動会！	大久保育成会主催のもと、夏休み期間の小学生を対象としたミニ運動会を開催した。既存のイベントではなく、初めてのイベントだったが子どもたちに楽しんでもらえた。
9	みなと子どもの家	みなと子どもの家にて開催した小学生対象イベント。ねことねずみや瞬間移動ゲームでは、チームで協力しながら種目を行う姿を見ることができた。普段できない遊びでスポーツの価値を身体で理解してもらった。
11	ノルディック ウォーキング教室・ 秋(西部福祉会館)	平塚市西部福祉会館主催のもと、ノルディックウォーキングを通して高齢者との交流を行った。当日はノルディックポールの使い方をレクチャーし、レクレーションを交えながらウォーキングを行った。
12	多世代交流会	高齢者から幼児まで対象としたイベント。小さい子どもで流行っているピカピカブーを準備体操に取り入れ、クリスマスツリー作りを行い、昨年以上の盛り上がりが見られた。
	野球教室2019	本学の体育会硬式野球部と連携を取り、子どもたちに直接指導を行ってもらうスポーツ教室。当プロジェクトはアイスブレイクやイベントの運営などを行い、子どもたちのスポーツ経験の向上の場を提供した。
1	スポーツDAY	東京オリンピック・パラリンピックに関連したスポーツや遊びを行い、子どもたちにスポーツへの関心を高める事、さらにイベントを通して新たな友達、大学生との繋がりの場になることを目的とし実施した。
	バスケ教室	本学の体育会男子バスケットボール部と連携を取り、子どもたちに直接指導を行ってもらうスポーツ教室。当プロジェクトはアイスブレイクやイベントの運営などを行い、子どもたちのスポーツ経験の向上の場を提供した。



▶ 秦野市子どもまつり



▶ ニコニコ教室



▶ ノルディックウォーキング教室



▶ サッカー教室

❹ 協力団体

平塚市西部福祉会館、秦野市役所こども健康部子ども育成課、リフレッシュプラザ平塚、平塚市立みなと子どもの家、平塚市立大野子どもの家、平塚市立山城子どもの家、平塚市大久保育成会、平塚市都市整備部総合公園課、トッケイセキュリティ平塚総合体育館、平塚市立中原小学校（校長大野かおり様）、平塚市少年野球連盟、秦野市少年野球連盟、秦野市ミニバスケットボール連盟、平塚ミニバスケットボール連盟、平塚市教育委員会学校教育部教育指導課、東海大学体育会硬式野球部（男子）、東海大学体育会バスケットボール部（男子）、東海大学体育会サッカー部（女子）

❺ メディア掲載・放映

12/14 J:COM（TV）

サイエンスコミュニケーター

湘　南

達成目標　理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通して人と人とのつながりをつくる

学びのテーマ　科学の楽しさを発信するため、新しい視点にたち
積極的に広い知識や技術を学ぶ

リーダー	斉藤はな	工学部応用化学科	2年
サブリーダー	坂井亜由美	工学部応用化学科	2年
広報リーダー	池田秀樹	教養学部人間環境学科自然環境課程	2年
会計	大友祈莉	工学部精密機械工学科	2年
コーディネーター	萱場隆人	湘南健康推進室	
アドバイザー	岡田工	現代教養センター	
	長田和也	現代教養センター	

（参加人数　46名）

❶ 活動概要

サイエンスコミュニケーターは「理科離れを防ぐ」という目標達成に向けて活動している。目標達成に向けて、全国各地の学校や公共施設等で科学イベントを実施している。見て楽しむ実験ショーや実際に体験できる実験工作を通して、理科を楽しむ機会を提供している。目標達成するためには、たくさんの方々に理科と触れてもらう必要がある。そのため、多種多様な企画・イベントを開催し、継続的な活動をしていくことが重要である。



▶ 子ども科学館フェスティバル①

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

サイエンスコミュニケーターは、「理科離れを防ぎ、科学の楽しさを通じて人と人とのつながりを作る」という事を目標として活動している。私たちは近隣の小学校や商業施設、公共施設において、光の三原色や空気砲等の見て楽しめる実験ショーや、スライムや人工イクラなど実際に体験できる工作ブースを開催している。8月には当プロジェクト主催で「世界一行きたい科学広場in湘南2019summer」を開催した。東海大学湘南校舎の19号館にて他のプロジェクトや他団体の協力のもとで様々なブースを開き、地域の子どもたちに科学の楽しさを伝えるために活動した。大学周辺の小学校へのチラシ配布や、ホームページ・Twitterでの広報活動を行ったことで、当日は昨年度の1000人の来場者数を上回る1200人以上の来場者があった。また、このイベントの来場者にアンケート調査を行ったところ、8割以上の方に「楽しかった」や「理科が好きになった」と回答をいただくことができ、目標達成に繋がることができたと考える。

2019年度は、開催されるイベントの内容や時期に合わせた実験ショーや工作ブースを考え活動を行ったため、開催主催者様から当プロジェクトの活動に非常に興味を持っていただくことができた。その結果、初めて依頼を受けるイベントも増え合計で20件以上のイベントに参加した。新しいイベントに参加したことで、多くの人との繋がりを作り、科学の楽しさを沢山の方に伝えることができた。さらに、昨年度に比べ市内の公民館や子ども会などからの依頼が増えたため、より地域に密着・貢献した活動ができたと考える。

当プロジェクトは、イベントの企画・運営チーム、実験開発チーム、広報チームの3つから成り立ち、すべてのメンバーがいずれかのチームに所属し活動している。実験開発チームが主体となって新しい実験を開発し、企画・運営チームが率先してイベントを実行した。また、広報チームは実験ショーや工作ブースを体験した際だけではなく、自宅でも科学に触れる機会を提供するため、自分たちで考えた科学に関する内容の定期広報物「Scio～Reprint edition～」を作成・発行した。このような活動により、メンバー全員の知識が向上した。そのため、今年度の学びのテーマである「科学の楽しさを発信するため新しい視点に立ち積極的に広い知識や技術を学ぶ」を達成することができた。当プロジェクトは、科学イベントの会場以外の場所でも子どもたちが科学に触れ合う機会を提供することで、より多くの子どもたちが理科への興味、関心深めていくと考える。サイエンスコミュニケーターの働きは、子どもたちの理科への興味・関心をより深いものにすることができ、「理科離れ」という社会問題の解決にもつながるため、これからも活動を続けていきたい。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	子ども科学館 フェスティバル	伊勢原市立子ども科学館にて市内の子どもを対象に開催されている企画に参加した。芳香剤やスライムなどの工作ブースを計4つ出展し、当プロジェクトのブースには2日間で360人が参加した。
8	世界一行きたい科学広場 in湘南 2019 summer	当プロジェクトが主催となって湘南校舎の19号館にて行った科学イベント。14の団体を招き大規模な活動を行ったことで、当日の来場者数は1200人を超えた。様々なブースを通して科学を楽しんでもらった。
	世界一行きたい科学広場 inくまもと 2019	東海大学熊本キャンパスが主催となり開催されている。「キラキラくるくるステンドグラス」というブース名で実験を行い、2枚の偏光板とセロハンテープからステンドグラスのような様々な色や模様を楽しんでもらった。
	夏休みの子供体験 ワークショップ	本企画は平塚市内のショッピングモールであるラスカ平塚にて定期的に行われているイベントである。ショッピングモールでイベントを行うことで、科学にふれあう機会の少ない方を対象に活動することができた。
	親子de水道フレンズ	寒川市の寒川浄水場にて神奈川県営水道フレンズが開催した企画に参加した。色彩振動実験や雲を作る実験ショーを通して水の性質などを学んでもらうことができた。
	科学マジックショー	平塚市内の3カ所の児童施設にて、2つの実験ショーを行いそれぞれの実験の原理を教えることができた。空気砲を用いることで参加者の大人と子どもが一緒になって楽しんでもらい、科学の面白さを知ってもらえた。
10	ベネッセ・エコ プロジェクト inハロウィン	本企画は株式会社ベネッセホールディングス主催のイベントである。環境問題やエコ活動について考えることを目的としている企画であるため、環境問題について考えられるようなイベントブースを出展した。
11	子ども大学ひらつか	東海大学湘南校舎の19号館で岡田先生による空気の実験ショーと2個の工作体験ブースを行い、子どもたちに科学を身近なものとして楽しんでもらうことができた。今回は小学4～6年生を対象に実験を行った。
	三校合同企画 来て！見て！触れて！ サイエンス！	本企画は小田原市立富水小学校・泉中学校・東富水小学校三校のPTAからの依頼を受け実施した。1つの実験ショーと4つの工作ブースを展開する大規模なイベントとなった。
12	親子でトライ！ サイエンス教室	平塚市にある大原公民館で2つの実験ショーと8つのブースをグループに分かれた子どもたちに体験してもらい、身近にある科学を学んでもらった。当日は100名以上の方が来場した。



▶ 子ども科学館フェスティバル②



▶ 世界一行きたい科学広場in湘南 2019



▶ 科学マジックショー



▶ 子ども大学ひらつか

❹ 協力団体

特定非営利活動法人サイエンスリンク、特定非営利活動法人ガリレオ工房、株式会社ベネッセホールディングス、神奈川県立青少年センター科学部科学支援課、伊勢原市立子ども科学館、神奈川県平塚市教育委員会、神奈川県秦野市教育委員会、神奈川県伊勢原市教育委員会、OSC湘南シティ、ラスカ平塚、ボーノ相模大野

❺ メディア掲載・放映

8/8 神奈川新聞（新聞）、12/11 湘南ケーブルネットワーク「ワイド情報カフェ湘南館」（TV）

キャンパスストリートプロジェクト

湘　南

達成目標　地域の魅力を発信し、住民と学生の架け橋となることで地域発展を目指す。

学びのテーマ　地域の方々との交流を通じて、交渉力や立案力発信力を養う

リーダー	川東綾香	教養学部人間環境学科社会環境課程	2年
サブリーダー	大塚知晃	工学部光・画像工学科	2年
サブリーダー	坂西竜之介	工学部電気電子工学科	1年
広報リーダー	辻陸斗	教養学部人間環境学科社会環境課程	2年
会計	小野里りな	政治経済学部経済学科	2年
コーディネーター	佐野麻理子	チャレンジセンター	
アドバイザー	池谷美衣子	現代教養センター	

（参加人数　40名）

❶ 活動概要

本プロジェクトは、地域交流・地域活性化を目的にイベントを通して地域住民と学生の架け橋となることを目指している。具体的には、大学近隣に暮らす子どもから高齢者まで多様な世代の住民が学生とともに楽しめるワークショップ・イベントを学生主体で企画・運営を行う。他にも、地域の施設で学習支援や東海大学前駅の花壇を商店会の方と植栽を行っている。このように、地域住民と学生が積極的に交流できる場を通年で提供することで地域住民と学生の双方から末永く愛される場所の実現を目指している。



▶ クリスマスU-night 集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

私たちキャンパスストリートプロジェクトは、「地域の魅力を発信し、住民と学生の架け橋となることで地域発展を目指す」を目標に掲げ活動してきた。この目標を達成するために子どもから高齢者まで幅広い年代を対象に様々な活動を行ってきた。

1つ目は「スターフェステバル」である。このイベントは今年度初めて行った。「夏祭り」や「七夕」といった誰にでも楽しんでもらえる企画にしたいと考え、大学周辺に住む親子連れを中心とし、子どもからお年寄りまで、たくさんの地域住民の方々や学生、さらには私たち自身も交流できる場所にすることを目的として開催した。より会場の一体感を出し来場者同士の交流を図るために盆踊りと○×クイズをイベントの最後に行った。その結果、来場者・食を出店してくださった方々・チャレンジセンターのプロジェクト学生など会場にいる人たち全員が一体となって盛り上がることができた。さらに、「七夕」をより演出するために笹を会場に置き参加者が短冊に願い事が書けるようにした。書いてもらった短冊は、平塚八幡宮に奉納をした。しかし、当日は雨だったこともあり参加人数100人を目標としていたが50名程度にとどまった。

2つ目は「音食WEEK」である。毎年音食WEEKは6月に開催していたが今年は参加者を増やし、より一層地域の方と学生が交流できるように10月のグローカルフェスタの中で行った。また、マンネリ化にならないために演奏していただく音楽団体を新たに声かけたり、体験コーナーとして昔遊びの体験を行ったりと新しいことにも挑戦した。その結果、前年度より参加者を増やすこともでき、音食WEEKに協力いただいた出演者の方々やお店の方々、来場者の方々にも楽しんでいただくことが出来た。さらに、音食WEEK本番には、多く取材をしていただきより多くの方に音食WEEKとキャンパスストリートプロジェクトを知ってもらう機会になった。

3つ目は「クリスマスU-night2019」である。毎年、クリスマスU-nightでは日にちを分けてイベントを行っている。まず、ツリー設営では、東海大学前駅の広場にもみの木を立てクリスマスツリーの装飾・イルミネーションで陸橋や花壇の装飾を行って、駅前を華やかにしている。他にも、クリスマスツリーと大根幼稚園の園児たちに書いてもらった絵のペットボトルライトを点灯させるライトアップイベントをした。ライトアップイベントでは、学内の音楽団体の方に音楽を披露してもらうことでよりイベントが盛り上がった。ワークショップでは、地域の親子連れを主に対象とし工作や食を楽しんでもらった。本プロジェクトからは紙皿のリースと紙コップのツリーを出し、駅前でお店をやっているフルール 花もとさんにフラワーアレンジメント体験を開催していただいた。また、ライトアップイベントとワークショップで東海大学駅前商店会の方々に温かい豚汁を無料配布していただいた。どのイベントにも来場者が多く、多くの方々に楽しんでいただくことが出来た。

これらのイベントから地域の方々と交流することでこの街の魅力を学ぶことが出来、よりよいイベントにするためには地域の方々の声を聴くことが大切だということを学ぶことが出来た。さらに、私たちもこの街をより知っていくことが必要だと学んだ。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	秦野精華園での学習プログラム	大学近隣の障がい者自立支援社会福祉法人かながわ共同会秦野精華園に行き、ボランティアとして利用者に対して簡単な計算・漢字の読みなどの学習を支援した（以降、ボランティアとして3回実施）。
5	湘南フラワーガーデン	平塚市・湘南海岸公園で2日間開催されるイベントのボランティアとして参加した。
6	スターフェスティバル	7月7日の七夕祭りをお祝いするイベントであり、大学周辺の食店舗も招き、地域の方々や学生を対象としている。来場者同士が交流を深めるために、来場者に、調達してきた笹にかける短冊を書いてもらったり、学生も一緒になって盆踊りをすることで、七夕のイベントを楽しんでもらった。
	東海大学駅前花壇植栽	東海大学前駅の花壇を、地域活性化を図るために、自治会や地域の方々と一緒に植え替えて世話をした。2020年3月にも実施。
9	RAINDROP MUSIC「平塚のうた」MV撮影	RAINDROP MUSICの「平塚のうた」のMV撮影に参加した。
10	音食WEEK(グローカルフェスタ)	学生や大学周辺にゆかりのある団体の活動を通じて大学の雰囲気を伝える「音」、学内で出張店舗販売をしてもらい、この街ならではの雰囲気を伝える「食」の2つを融合させて「音楽を聴きながら食事を楽しむ場」を創出した。
	はだのお掃除隊	渋沢・秦野・東海大学前の各駅前をきれいにするためのボランティアに参加して、地域の人たちと一緒に掃除を行った。
11	はばたき祭	秦野精華園で開かれる利用者と地域住民の交流を図るお祭りに、利用者の方々の補助をする目的でボランティアとして参加した。 会場では、利用者の方々との親交を深め、地域貢献をする目的があり、バザーや模擬店などが開かれ、主に販売や、お金の計算を手伝った。
12	クリスマス U-night	東海大学前駅にクリスマスツリーを立て、駅周辺でイベントを行い、クリスマスの雰囲気を作り、地域と学生との交流機会を作ることで、地域活性に貢献した。
1	幼稚園訪問	地域の幼稚園に訪問し、動物探しを行って園児たちと交流をはかった。



▶ 音食WEEK①



▶ 音食WEEK②



▶ クリスマスU-nightワークショップ



▶ 幼稚園訪問

❹ 協力団体

株式会社ヨネザワ楽器イベント事業部、社会福祉法人かながわ共同会秦野精華園、フルール 花もと、有限会社小川電機商会大根店、北矢名日の出自治会、東海大学駅前商店会、東海大学駅前商店会婦人部、フレッシュフーズ片野、秦野市立大根幼稚園、秀和ビルメンテナンス株式会社湘南営業所、Jlodge、RAINDROP MUSIC、秦野観光和太鼓、くるみ、幸せ餃子、旅するクロワッサン、東海大学チャレンジプロジェクト・病院ボランティアプロジェクト、東海大学チャレンジプロジェクト・Sunflower、東海大学チャレンジプロジェクト・DAN DAN DANCE&SPORTSプロジェクト、東海大学ユニークプロジェクト・Connect、こちらラジオ番組制作部、東海大学望星会お笑いサークル ラフタ、東海大学地域連携センター地域連携課、カフェフルフル、スマークカフェ、ガトーしらはま、パティスリークラベリーナ

❺ メディア掲載・放映

6/20 タウンニュース平塚版（WEB）、6/22 湘南ケーブルテレビ（TV）、9/10 RAINDROP MUSIC「平塚のうた」MV撮影（YouTube）、10/14 タウンニュース秦野版（情報誌）、10/17 J:COM（TV）、10/19 J:COM（TV）、10/19 タウンニュース秦野版（WEB）、12/4 J:COM（TV）、12/4 タウンニュース秦野版（WEB）

Tokai Formula Club

湘　南

達成目標　第17回全日本学生フォーミュラ大会総合6位を獲得する

学びのテーマ　学生フォーミュラ活動を通して、社会に貢献できるエンジニアであるために必要な技術力とコミュニケーション力を学ぶ

リーダー	木村優希	工学部動力機械工学科	3年
サブリーダー	高橋潮磨	工学部動力機械工学科	3年
サブリーダー	福地健人	工学部動力機械工学科	3年
広報リーダー	鶴岡嵩政	工学部動力機械工学科	2年
会計	妻嶋泰我	工学部機械工学科	2年
コーディネーター	関根啓由	技術支援課	
アドバイザー	加藤英晃	工学部動力機械工学科	
	成田正敬	工学部動力機械工学科	
	吉永昌史	工学部動力機械工学科	
	森下達哉	工学部動力機械工学科	
	髙橋俊	工学部動力機械工学科	
	山本健	工学部動力機械工学科	

（参加人数　63名）

❶ 活動概要

本プロジェクトは、「学生が自ら構想・設計・製作した車両により、ものつくりの総合力を競い、産学官民で支援して、自動車技術ならびに産業の発展・振興に資する人材を育成する。」という大会の理念に賛同し、2004年の第2回大会から継続して学生フォーミュラに出場を重ねている。OB・OGの人数は200人を超え、それぞれが経験を活かし自動車開発を初めとするものつくりの最先端で活躍している。２０１９年度は大会の理念を基に1人1人が活動の中で計画、実行、評価（TDC）を出来るように活動を行い、チーム全体で目的が達成出来るプロジェクトを目指す。



▶ 学生フォーミュラ日本大会 集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

本プロジェクトは、前年度にメンバーの活動に対する取り組み方や車両開発方法を見直したことにより、第16回全日本学生フォーミュラ大会において総合８位を獲得することに成功した。2018年大会の結果を踏まえて2019年の大会では「第17回学生フォーミュラ日本大会2019で総合優秀賞圏内の総合6位を獲得すること」を目標とした。そのために必要なこととして本年は「学生フォーミュラ活動を通して、社会に貢献できるエンジニアであるために必要な技術力とコミュニケーション力を学ぶ」と学びのテーマを設定した。この学びのテーマはエンジニアとして必要な技術力を身につけるだけでなく、2018年に経済産業省が新たに定義した「人生１００年時代の社会人基礎力」においても挙げられている「チームワーク」という部分がエンジニアとしてだけでなく将来社会人として必要である能力であることから本プロジェクトでは「コミュニケーション力」と考え、設定した。

学生フォーミュラは車両の企画、設計、制作、走行を行うだけでなく、コスト製造審査やデザイン審査、プレゼンテーション審査など車両の設計の妥当性や実際に仮想の販売を行うためのマーケティング力が問われる。総合成績を向上させるためには全ての審査で上位に入賞することが必要であり、そのためにメンバー間の連携を大切に取り組んだ。

本年度に行った取り組みとして、チームのマネージメント方法と組織体制の見直しを行った。昨年度まではチームの全体統括をプロジェクトリーダー、各班の統括を各班リーダーで行っていた。その結果、スケジュールや車両開発など様々な問題点があった。そこで本年度はプロジェクトマネージャーを設立した。プロジェクトマネージャーはプロジェクトにおける問題点を運営やメンバーの面から洗い出しプロジェクトリーダーやメンバーとともに問題解決に向けて対策案の検討を行い、様々な問題の早期解決やスケジュールの遅延を防ぐために対策を講じていった。更にコスト製造審査が一つの弱点であったことから審査の担当を2018年のコスト製造審査の担当者に担ってもらい将来に繋がるように取り組み方などの形成を行った。その結果、直近の2年間で提出の遅延が起きていたコスト製造審査のレポート提出を期日通りに提出することが出来た。更に全ての静的・動的審査に参加し、完遂・完走しているチームに送られる日本工業会長賞を5年ぶりに獲得することが出来た。しかし、総合成績では総合7位と自分達の設定した目標に後一つ届かなかった。

今年度は、最終的に目標には届かなかったが、一方で直近の数年間で達成できなかったことも達成することの出来た1年間になった。そして1年間の活動を通じてミーティングや車両開発、走行会、大会本番などでメンバー間のコミュニケーションを取ることの大切さを学ぶことができた。この1年間で車両開発やチームマネジメントにおいて成功ばかりでなく多くの失敗をしたこともあったが、全て将来に繋がると確信している。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	SHCCミーティング(第61回SHCC大磯ミーティング)	湘南ヒストリックカークラブが主催するイベントにメンバーがサポートとして参加。プロジェクトの紹介や2018年度の車両走行も行い、多くの来場者方に喜んでいただくと同時に交流を深めることができた。
6	第1回関東学生フォーミュラ連盟主催試走会	2019年度のエンジンを2018年度車両へ搭載して走行を行った。エンジンの走行データ収集を行うのとオペレーション経験を積むことを目的に行った。
8	2018年度自動車技術会三支部合同試走会	毎年行われる試走会で「プレ大会」と呼ばれているもの。大会車両の完成が遅れたこともあってトラブルが続出して多く走行することが出来なかったが車両問題点や車検対策について理解することができた。
	第3回関東学生フォーミュラ連盟主催試走会	2019年度車両のテスト走行を重ねていき、ドライバーの車両に対する特性理解を深めると同時にトラブル出しを行った。
	自動車技術会関東支部主催ツインリンクもてぎ試走会	本試走会では関東地域の大学が多く参加。大会前の最後の本格的な試走会ということもありメンバー一同緊張感を持って取り組んだ。その結果、参加したチームの中でセッションによってはトップタイムを記録した。
	第17回学生フォーミュラ日本大会	今年は5日間に渡り天候に悩まされることもなく過ごすことができた。メンバー一丸となって大会へ挑んだ結果、昨年から順位を一つ上げて総合7位を獲得することができた。
10	湘南ひらつかテクノフェア 2019	本イベントへ初めて2018年度の車両出展を行った。当日は多くの地元企業方々へ活動についてアピールすることができた。
	第47回東京モーターショー	学生フォーミュラ大会の紹介で代表として出展をした。当日はビストン西沢様によるトークショーへ参加した他にデモ走行を行った。展示では来場したお子様方に乗っていただき楽しんで貰うことができた。



▶ 学生フォーミュラ日本大会 参戦模様①



▶ 学生フォーミュラ日本大会 参戦模様②



▶ 学生フォーミュラ日本大会 参戦模様③



▶ 学生フォーミュラ日本大会 参戦模様④

❹ 協力団体

スズキ株式会社、トタル・ルブリカンツ・ジャパン株式会社、株式会社N.A.C.T.、株式会社IDAJ、有限会社鈴村製作所、日立金属株式会社、有限会社及川製作所、株式会社デンソー、高砂産業株式会社、丸紅情報システムズ株式会社、株式会社VSN、株式会社FCC、株式会社オートバックスセブン、株式会社レント、株式会社平塚イトウネジ、NTN株式会社、株式会社東科精機、大井松田カートランド、HPCシステムズ株式会社、有限会社福岡ゴム工業所、AVO/MoTeC JAPAN、株式会社和光ケミカル、株式会社ニフコ、エヌ・イー有限会社、株式会社イリスK.K.IRISU（C.ILLIES&CO.）、株式会社電研社

❺ メディア掲載・放映

10/28 Motor Fan illustrated Vol.156（雑誌）
10/17 MONOist「学生フォーミュラ2019：出身者と現役が語る『学生フォーミュラで培われる“現場力”』（4/4）」

ライトパワープロジェクト

湘　南

達成目標　大会に出場し最高の記録を樹立するとともに、社会に貢献する活動を展開する

学びのテーマ　チームの一員として責任を持つことの重要性を学ぶ

リーダー	露木悠葵	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	3年
サブリーダー	藤崎隆真	工学部動力機械工学科	2年
サブリーダー	中村岳	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	2年
広報リーダー	赤根祐作	工学部機械工学科	2年
会計	高井朗	工学部機械工学科	2年
コーディネーター	平島滋義	チャレンジセンター	
	村井健太郎	チャレンジセンター	
アドバイザー	木村英樹	工学部電気電子工学科	
	福田紘大	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	
	池田知行	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	
	佐川耕平	工学部電気電子工学科	

（参加人数86名）

❶ 活動概要

学生自らが中心となって、ソーラーカー・電気自動車・人力飛行機の設計・製作を行いものつくりについて学ぶ。そのうえで、ソーラーカーの国際大会や鳥人間コンテストに出場し、優勝することを目標とし活動を行う。また、ものつくりの楽しさや環境を守るエネルギーのすばらしさについて、展示会やものつくりイベントを通して社会に伝える企画を実施する。



▶ テストフライト 準備

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

ソーラーカーチームは、オーストラリアで行われたBRIDGESTONE World Solar Challenge 2019 において、厳しいレース環境の中、準優勝を成し遂げた。これは、試走時にトラブルを想定した練習を増やしたことで、レース時のタイムロスを減らすことが出来たためだと考える。また、総合優勝したチームから、チームとして効率の良い動き方を学んだ。今後は、メンバー一人ひとりがチームでやりたいことを明確にし、チーム力の底上げを行う。また、受け身の姿勢ではなく自ら考え行動することで、さらなるチーム力の向上が出来ると考える。

電気自動車チームでは、秋田県大潟村で行われたWorld Econo Move 2019 に参戦し、電気自動車鉛蓄電池部門オープンクラスとWorld Econo Move LIGHT Aクラス部門に出場した。結果は、鉛蓄電池部門において総合3位となり、昨年度よりもさらに順位を上げることが出来た。LIGHT Aクラスにおいては、昨年度と同様に準優勝を成し遂げた。これは、レース時を想定した練習を繰り返したことで、メンバーそれぞれがスキルアップしたことが要因だと考える。大会を通して、エネルギーロスの少ない車体や計器類の整備方法を学んだ。また、学年関係なく意見が言える環境づくりを行ったため、チームの結束力が向上したことを実感した。今後は、メンバー全員が率先して作業できるようにより良い作業環境を作る。

人力飛行機チームでは、4年ぶりに書類選考を通過し鳥人間コンテストに出場することが出来た。これは、チームとして初の女性パイロットを起用するなど、新たなことに果敢に挑戦したことが大きな要因だと考える。しかし、大会当日は天候に恵まれず記録を残すことは出来なかった。だが、出場した経験から大会における機体の運用の難しさや、メンバーの応用力の重要性を学んだ。また、多くのチームと関わることが出来たため、今までチームに無かった技術力やチームの運営方法を学んだ。これらのことを生かして、今後はメンバーの能力の水準を高め、チームの統一化を図る。

社会貢献活動として、地域の小学生を対象とした様々な企画を開催した。それぞれイベントの規模は異なるが、合わせて200人近い参加者を募ることが出来た。アンケートの結果からキット製作や講義を通して、ものつくりに関心を持っていただくことが出来たと考える。また、メンバーが主体となって企画運営を行ったため、企画力や実行力を向上させることが出来た。その他にも、企業なども出展する展示会や建学祭、オープンキャンパスなどで展示活動をすることで、多くの方々に私たちの活動を知っていただいた。

これらの活動から、チームとしての活動を円滑に進めるために、メンバー各々が受け身の姿勢を変え、果敢にチャレンジすることの重要性を学ぶことが出来た。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	World Econo Move 2019	秋田県大潟村で行われる、World Econo Move 2019GPの開幕戦。高校生から社会人のチームまで全国から集まりレースを行う。鉛蓄電池部門総合3位、LIGHT Aクラス準優勝を納めた。
7	鳥人間コンテスト	滋賀県、琵琶湖において開催された「鳥人間コンテスト2019」に参加した。大会では、人力プロペラ機部門に出場したが、悪天候のため大会が中止となり記録を残すことは出来なかった。
8	ものつくり教室	近隣の小学生を対象に、ものつくりの体験イベントを開催した。イベントでは、人力飛行機チームの紹介や飛行機キットの製作を行い、ものつくりの楽しさや素晴らしさを感じていただいた。
10	2019 Bridgestone World Solar Challenge	オーストラリアで開催される世界最大規模のソーラーカーレースで「ダーウィン」から「アデレード」まで、約3000kmの走行時間を競う。15回目の開催となる今大会では世界の23の国と地域から47チームが参戦し、チャレンジャークラス準優勝を納めた。
11	エコカー教室	近隣の小学生を対象に、メンバーがソーラーカーと省エネについて講義を行い、電気自動車とソーラーカーの走行も行った。企画後にたくさんのお礼の手紙をいただくことが出来た。
1	東京オートサロン	幕張メッセで開催される国内最大規模のモーターショー。2019 Bridgestone World Solar Challengeで準優勝を獲得した2019 Tokai Challengerの展示を行った。



▶ ワールド・エコノ・ムーブ参戦



▶ 鳥人間コンテスト 集合写真



▶ ブリヂストン・ワールド・ソーラー・チャレンジ参戦



▶ ブリヂストン・ワールド・ソーラー・チャレンジ 集合写真

❹ 協力団体

東レ株式会社、東レ・カーボンマジック株式会社、トヨタ自動車株式会社、株式会社ブリヂストン、株式会社ミツバ、KYBモーターサイクルサスペンション株式会社、株式会社裕源、日本マイクロソフト株式会社、株式会社ソフトウェアクレイドル、ビジュアルテクノロジー株式会社、ダッソー・システムズ株式会社、日野自動車株式会社、株式会社ベクター、有限会社三島木電子、国立研究開発法人産業技術総合研究所、日本ケミコン株式会社、株式会社ジェイテクト、株式会社和光ケミカル、植木プラスチック株式会社、飯田通商株式会社、株式会社日本デジコム、石塚工業株式会社、株式会社パトライト、株式会社ソーアップ、株式会社プロジェクト・ミュー、サンスター技研株式会社、国立研究開発法人科学技術振興機構CREST、ラップジャパン株式会社、人気酒造株式会社、株式会社島半、鹿島化学金属株式会社、NPO法人クリーン・エナジー・アライアンス、一般社団法人日本太陽エネルギー学会、株式会社三栄、CQ出版株式会社、東海大学情報技術センター、一般社団法人太陽光発電協会、外部アドバイザー　池上敦哉様、技術士　西海秀文様、プロジェクトOB（菊田剛広様、徳田光太様、新井隆史様、平澤浩人様、竹内豪様）

❺ メディア掲載・放映

8/4 ル・ボラン（web）、8/27 Response.20th（web）、8/28 Car Watch（web）、8/28 ゴム報知新聞（web）、9/3 産経新聞（web）、9/4 八王子経済新聞（web）、9/5 Motor-Fan TECH.（web）、9/6 ニッポン放送（web）、9/12 タウンニュース（web）、9/14 モーターファン・イラストレーテッド（書籍）、9/17 神奈川新聞社（web）、10/13 SBS（webラジオ）、10/17 INDIAtv（web）、10/17 共同通信社（web）、10/17 時事通信社（web）、10/18 motoring（web）、10/23 carview!（web）、10/29 日刊ケミカルニュース（web）、11/1 神奈川新聞社（新聞）、11/1 日豪プレス（web）、12/27 電波新聞（新聞）、12/29 BSテレ東（TV）

東海大学学生ロケットプロジェクト

湘　南

達成目標　到達高度10kmを見据えた包括的なロケット開発と、10km到達機に備えた分野にとらわれない団体の組織づくり

学びのテーマ　高度10kmを見据えたロケット開発をする上で、個が組織に対してできることを考える

リーダー	渡邉琴巴	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
サブリーダー	景山英一郎	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	4年
サブリーダー	青柳海	理学部物理学科	4年
広報リーダー	田村和樹	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	1年
会計	竹内大哉	工学部機械工学科	3年
コーディネーター	大城萌子	事務課	
アドバイザー	那賀川一郎	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	
	森田貴和	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	
	池田知行	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	
	中篠恭一	工学部航空宇宙学科航空宇宙学専攻	

（参加人数52名）

❶ 活動概要

学生団体初の到達高度100kmの達成を目標とし、ハイブリッドロケットの開発を行っている。この最終目標を達成するため、到達高度10kmの達成を中間目標とし、年2回打上実証実験を実施している。開発しているロケットは学生が設計、製作しており既製品をほとんど使用していない。
また、ロケット開発以外にも他大学や企業でロケットを取り扱っている団体の方とも広報活動の場で積極的に交流を行っている。



▶ 集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

当団体の中間目標である到達高度10kmの達成の前段階として、自団体の高度記録更新を目指し、夏の能代宇宙イベントに向けてH-50号機の開発を行った。H-50号機には10km到達機に備えた新規開発品であるアクティブバルブの打上実証も兼ねていたが、台風接近による風速制限の超過および搭載物のトラブルにより打ち上げを断念する結果となった。これを踏まえて、冬の北海道大樹町での打ち上げでは、夏に予定していたアクティブバルブの実証の他に、回収機構の内製化、フライト中のエンジンデータの取得を行い、10km機をより確実に打ち上げるための技術の積み上げを行うこととした。しかし、新型肺炎の感染拡大による渡航制限より、打上実証に至らなかった。結果、今年度は打ち上げを行うことができなかったが、今年度で積み上げた技術をさらに確実なものとし、来年度の打上実証実験に備えていきたい。

また、今年度は到達高度10kmに備えて、メンバーが分野にとらわれず開発を行えるよう、団体の組織づくりに力を入れた。当団体の体制のメリットとしては、機体の外装や回収機構の開発を行う構造・機構系、電子基板の設計や開発を行う電装・制御系、ロケットエンジンやバルブシステムの設計・開発を行う燃焼系に分かれて開発を行っており、メンバーがそれぞれ担当するコンポーネントにおける専門知識を持っていることが挙げられるが、デメリットとして、他分野の専門知識を取り入れづらいことが挙げられる。このデメリットを踏まえ、今後のロケット大型化を見据えたとき、メンバーひとりひとりがロケットシステム全体を理解できるよう、今年度も新入生に対して技術3班への仮配属を行った。新入生がこれから学ぶ専門分野に限らず、全分野の基礎知識を得るための勉強会として、座学や実習を行った。その結果、ほぼ全員の新入生に対して全分野の教育を行うことができた。また、年2回の渡航の参加や普段の活動も積極的に参加してくれる新入生が多かった。この結果を踏まえ、来年度も引き続き仮配属を行っていきたい。

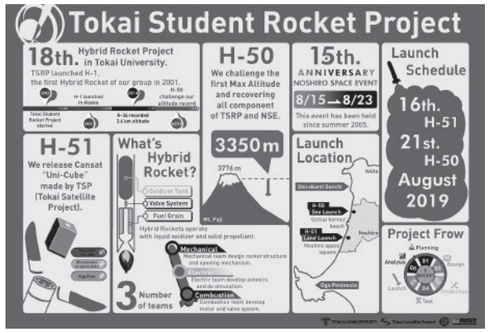
その他にも、ビジネスチャットツールであるSlackを導入し、これまでメールで行ってきた開発のやり取りをSlack上で行うこととした。これにより、メンバー同士のやり取りがスムーズになること、Slackにカレンダーやタスク管理ツールを同期させることで、プロジェクトをより円滑に進めることができた。また、やり取りの他に資料等も記録として残るため、先輩の卒業後も引継ぎ資料として残すことができるため、今後も活用していきたい。

また、今年度は能代宇宙イベントでのポスター賞の受賞や広報イベントの参加など、十分な広報活動が行えた。ロケットの大型化につれ、多くの方の協力が必要となってくることから、引き続き積極的な広報活動を行っていきたい。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	公開燃焼実験	新入生の新歓活動を主目的とした自作ハイブリッドロケットエンジンの公開燃焼実験を実施した。
5	各種講習会	安全講習会（全体向け）、システム講習会（新入生向け）、SRP講習会（新入生向け）などを開催。ロケット開発を行う上で気を付けなければいけないこと、SRPの組織体制や開発に用いているシステムの確認等を行った。
	新入生仮配属	技術3班への仮配属を実施し、新入生に各班の雰囲気を知ってもらうとともに、基礎知識の習得のため勉強会や実習を行った。
8	Maker Faire Tokyo 2019	東京ビックサイトにて行われた、ものつくりを行う団体や企業が交流するイベントに出展。機体の各コンポーネントや昨年度製作した10km機モックアップの展示を行った。
	第15回能代宇宙イベント	秋田県能代市で行われた宇宙イベントに参加し、陸打ちと海打ちの2機体の実験、安全シンポジウムでは新型GSEについての発表を行った。また、能代市民ポスター展において優秀賞を受賞した。
10	平塚工科高等学校文化祭	高校文化祭にてロケットの展示や広報活動を実施した。
11	建学祭	ロケットの展示および外部の広報イベントでは普段展示していないランチャーや燃焼架台などの展示を行った。また、子ども向けペーパークラフトロケットの製作教室を行った。
12	UNISEC WS	UNISEC加盟団体に向けた自団体の紹介や、自作エンジンの開発計画の発表を行った。
1	ロケット交流会	日本科学未来館にて実施され、他大学や企業でロケットを扱う団体や一般の方と交流を行った。
3	冬季打上実証実験	北海道大樹町でのハイブリッドロケット打上実証実験。新型肺炎の感染拡大による渡航規制により打上を断念した。


▶ ランチャ打ち上げの様子



▶ 能代市民ポスター



▶ TSRP H-50ロケット

❹ 協力団体

北海道大樹町役場企画課、国土交通省東京航空局帯広空港出張所、国土交通省東京航空局釧路航空事務所、国土交通省札幌航空交通管制部、国土交通省航空宇宙管理センター、北海道釧路方面広尾警察署、航空大学校帯広分校運用課、インターステラテクノロジズ株式会社、一般財団法人あきた宇宙コンソーシアム、上町すみれ会、夢工房咲く・咲く、特定非営利活動法人有人ロケット研究会、能代宇宙イベント協議会、株式会社ホーペック、有限会社スリーホープ、Photron、富士通セミコンダクター株式会社

❺ メディア掲載・放映

8/4・8/15・8/17 北羽新報（新聞）、12/24 北海道新聞（新聞）

Tokai International Communication Club

湘　南

達成目標　異文化を感じてもらう機会を増やし、互いに尊重し合う。

学びのテーマ　多くの情報を取り入れ、個人がメンバーとしての自覚を持ち、互いの価値観を学ぶ。

リーダー	渡辺悠太	政治経済学部経営学科	2年
サブリーダー	野崎零詞	文化社会学部広報メディア学科	2年
サブリーダー	東内ひかる	政治経済学部経営学科	2年
広報リーダー	宮本幸太郎	政治経済学部政治学科	2年
会計	林健太郎	工学部電気電子工学科	2年
コーディネーター	雨木秀文	技術支援課	
アドバイザー	田口香奈恵	国際教育センター留学生支援教育部門	

（参加人数48名）

❶ 活動概要

私たちTokai International Communication Club（以下、略称をTICCとする）は、「多文化共生社会の実現」をビジョンに掲げⅠ学習支援、Ⅱ異文化理解、Ⅲ国際交流という、「TICCの３本柱」を礎に活動している国際ボランティアプロジェクトである。

⑴にこティー教室（外国にルーツを持つ子どもたちへの学習支援）、⑵シンポジウム（異文化理解を深めるための日本人学生に向けた勉強会）、⑶異文化理解ワークショップ（異文化を知ってもらうためのイベントを開催）、⑷ Foreign Students Club (留学生と日本人学生の橋渡しとなるイベントを開催) 以上の4つの企画から、それぞれの視点で多文化共生社会の実現への取り組みを進めていく。



▶ TICC sports festa 集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

私たちTICCは異文化理解、学習支援、国際交流の３つの視点から「多文化共生社会の実現」を目指すという通年の目的を果たすために、今年度の達成目標を「異文化を感じてもらう機会を増やし、互いに尊重し合う」と設定し、その目標を達成するための学びのテーマを「多くの情報を取り入れ、個人がメンバーとしての自覚を持ち、互いの価値観を学ぶ」とした。にこティー教室では前年度の反省でもある支援者不足を改善するために、メンバー間の連携を強化し、日毎に担当を決め支援者の増加を図り、子どもたちの支援環境向上に努めたことで、多くのメンバーが異文化に触れ、たくさんの価値観を学ぶことができた。しかし、支援者同士の子どもの現状に関するメンバーの情報共有不足が反省として挙げられた。情報共有の見直しをすることで、メンバーがより子どもたちの現状や意欲などを知ることができ、支援の向上に繋がると考えたため、来年度への改善点としたい。異文化理解ワークショップでは計２回のイベントを実施した。イベントでは他企画メンバーの参加者が去年よりもかなり増えたおかげで、イベント準備の効率はもちろん、メンバー内での異文化理解に対する学びや意識の向上が見られた。アンケートでも昨年度のイベント時と比べてより多くの参加者の方に異文化への理解が深まったと回答していただいた。一方で、反省として外部からの参加者の固定化が挙げられた。リピーターの存在は重要だが、多文化共生社会の実現を果たすには、より多くの方にイベントに参加していただきたい。そのため来年度では、にこティー教室で繋がりのある秦野市の小学校の先生との連携を深めるなど、他の手段を用いた広報力の向上を図りたい。シンポジウムでは今年度は計2回イベントを行い、メンバーはもちろん参加者の方に多文化共生について学んでいただいた。12月に行った「非言語コミュニケーション」をテーマにしたイベントでは、実際に東海大学の先生に特別講師として来ていただいて、非言語に現る文化の違いについて学び、異文化理解、また多文化共生社会の実現のために大切な情報を取り入れ、学ぶことができた。しかし、イベントでは参加者不足が問題であったため、計画的なイベント準備を心掛け、宣伝期間を長く設けるなど広報手段の改善を図りたい。Foreign Students Clubでは、スポーツや食事を通して国際交流をしてもらうSports FestaやCommunication Lunchに加え、日本文化に触れてもらう高尾山登山や餅つき大会を行った。いずれも参加者の満足度は高く、メンバーがポスター宣伝だけではなく友人に声をかけるなどの直接的な宣伝のおかげで昨年度に比べて参加者も増加し、多くの人に異文化を感じてもらうことができた。一方で、留学生と日本人学生の交流不足が反省として挙げられたため、普段のミーティングでは常に参加者の目線に立ち、イベント構成を練っていきたい。そして、TICC全体としては、年に３回行う振り返りシートで、学びのテーマにチーム・個人で取り組めたかという問いでは、いずれも３回目が最も高い平均点になり、メンバーが年間の活動を通して学びのテーマを意識し、達成目標を果たすことを考えながらイベントに臨んでいたことが分かる。そして、年間の数多くのイベントの中で、夏季休暇中の９月に山中湖のセミナーハウスで行った研修旅行では、メンバーにとって特に学びのテーマを意識することができた。日頃の活動ではそれぞれ４つの企画ごとでの活動が多く、メンバーのほとんどが異文化理解、学習支援、国際交流の３つの視点すべてを意識しながら活動することができていない。これを解消するために、２泊３日でメンバー全員が4つの企画すべてのミーティングを体験してもらい、普段とは異なった他の視点から多文化共生を考え、感じ、学ぶ機会を設けることができた。また、この研修旅行では普段話す機会が少ない学年や他企画メンバーとの交流や、新しく入ってきた1年生同士の仲を深めることができ、互いの価値観を学ぶことにも繋がった。この1年ではイベントやミーティングを通して、多くの価値観を知り、学び、理解することの大切さを感じることができた。来年度も多文化共生社会の実現を目指して精進していきたい。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	にこティー教室	秦野市に住む小・中学生を対象に、学校の宿題に取り組んだり、遊びを通して日本語に慣れてもらったりした。はだの子ども支援プロジェクト「ゆう」の方にご協力いただき、毎週水・木曜日に活動を行った。
	Communication Lunch（通年）	東海大学に通う留学生と日本人学生の交流を目的に、毎週火曜日に昼食を通して交流を深めてもらうイベントを行った。持ち寄るご飯にもそれぞれの文化が窺え、話題の種になり活発な交流をすることができた。
5	TICCぶらり旅	TICCメンバーと日本人学生、留学生で高尾山登山に行き、観光名所を訪れたり、日本食を楽しんでもらうイベントを行った。実際に足を運ぶことにより、五感で日本文化に触れてもらうことができた。
6	日本の未来を考えるワークショップ『For the Future』～グローバル化していく日本社会～第10回世界と繋がるために、いま私たちができること	「多文化共生」をテーマとしたシンポジウムを開催し、参加者には「DNA鑑定」に関する動画を見てもらった。また、自分が外国人の立場で考える設問を準備し、客観的に多方面から考えられるようなイベントを開催した。
	TICC Sports Festa	フットサルやドッジビーを通じて、留学生と日本人学生の交流の場を設けることを目的としたイベントである。人気のあるスポーツを取り入れ、また、言語の壁を乗り越えて参加者に楽しんでもらえるような企画にした。
7	世界の国々を知ろう！～アメリカ合衆国編～	秦野市に住む小学生とその保護者を対象に世界の文化を知ってもらうことを目的とし、世界各国の地理や挨拶、食生活、習慣などを紹介する。このイベントでは、アメリカ合衆国を取り上げた。
8	夏休み こども支援プロジェクト	普段にこティー教室に来てくれている子どもたちの夏休みの宿題サポートと、日本人と明るくコミュニケーションをとる場を提供すること、話すことの楽しさを感じてもらうことを目的として活動をした。
9	翰林日本語学院訪問	横浜市青葉区にある翰林日本語学院を訪れ、語学学校に通う生徒さん達と一緒にけん玉、かるた等の日本遊びやを餃子作りを通して交流を深めた。
12	日本の未来を考えるワークショップ「For the Future」～グローバル化していく日本社会～第11回「非言語コミュニケーションで伝わること」~Nonverbal Communication	「Nonverbal communication(非言語コミュニケーション)」がテーマのシンポジウムを開催し、非言語にあらわれる文化の違いについて学ぶ。身振りや手振り、表情などの異文化理解で役立つ非言語コミュニケーションについて考えることを目的とする。
	TICC もちつき大会	留学生に「餅つき」を体験してもらうことで、日本文化への関心を深めてもらうとともに、日本人学生との交流を目的にイベントを行った。味付けや開催場所を工夫し、また、習字ブースを設けることで多くの方に参加してもらうことができた。



▶ 2019年度秋学期にこティー教室



▶日本の未来を考えるワークショップ『For the Future』



▶ 2019年度翰林日本語学院訪問



▶ 世界の国々を知ろう！ロシア連邦編

❹ 協力団体

はだの子ども支援プロジェクト「ゆう」、翰林日本語学院、秦野市立南公民館、神奈川県秦野市教育委員会

❺ メディア掲載・放映

10/11 読売新聞（新聞）

3.11生活復興支援プロジェクト

湘　南

達成目標　活動の終わりを見据えて、今ある企画を地域にとって持続可能なものにする。

学びのテーマ　企画をよりよくするために協力の仕方を学ぶ。

リーダー	越光蓮	工学部建築学科	2年
サブリーダー	須藤和基	工学部建築学科	3年
サブリーダー	加藤悠人	工学部建築学科	3年
広報リーダー	栗原直樹	工学部土木工学科	3年
会計	井上京香	法学部法律学科	2年
コーディネーター	小澤伸将	チャレンジセンター	
アドバイザー	堀本麻由子	現代教養センター	
	浅井亜希	文化社会学部北欧学科	

（参加人数35名）

❶ 活動概要

本プロジェクトは、活動理念である「持続可能な開発のための復興支援」を掲げ、被災地の住民による主体的な復興を行ってもらえるよう、被災地のさらなるコミュニティ発展や、震災の風化防止のため東北の当時の様子や現在の復興段階などを伝えること、東北の魅力発信を目的とし活動している。また、本プロジェクトの活動10年目に向けて、活動の記録や地域における復興の歩みをまとめた「活動10年史」の製作を行っている。



▶ 結の道整備 集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

本プロジェクトの2019年度の達成目標は、「活動の終わりを見据えて、今ある企画を地域にとって持続可能なものにする。」であった。2020年度はプロジェクト発足当時に掲げた10年を活動の節目とする中での最終年度であり、それを見据えて今ある企画を地域にとって持続可能なものにするという目標を掲げた。

岩手県大船渡市にある泊地区では、8月に「夏のこども教室〜Let's bamboo challenge!〜」を開催した。この企画は、泊地区の近隣にある大船渡市立越喜来小学校の児童を対象に、泊地区で採れた竹を使った工作教室を行った。地元で採れた竹を用いて楽しんでもらうことで、”子供たちの地元への愛着度向上””子供たち同士の学年を超えたコミュニティ発展”を目的とし、参加者へ行った事後のアンケートでは「来年も参加したい」などの声をいただいた。このことから、地域の子供たちには企画に参加する意欲があり、地域にとっての企画の必要性を感じた。しかし、本企画は学生が中心となって運営されたため、企画の運営に関して地域の方が自発的に活動を行うことが叶わなかった。来年度は地域の方が主体的に活動できるよう、運営にもご協力いただき、越喜来小学校の児童以外の地域の方も参加できる企画を考えてゆく。

宮城県石巻市にある相川地区・小指地区では、8月に「小指大縁日〜令WA(和)もWA(輪)！夏の竹まつり！〜」を開催した。2016年度に小指地区に建設した「小指観音堂」にて実施し、小指地区で採れた竹を使った流しそうめんを行った。震災以降、小指地区では子供と大人が交流する機会が減少しているため、”世代間交流の場”とすることを目的とした。企画実施までの間に月に1度地域の方との会議を設け、企画に関する打ち合わせを行う中で、「竹を使ったイベントはやったことがないから面白いだろう」といった意見をいただくなど、地域の方が求める企画を作り上げることが出来た。しかし、運営に関しては学生に依っているため、来年度からは小指大縁日が通例の行事となり、地域の方が主体的に活動できるような企画を考案し、地域の方との連携も密に行ってゆく。

学びのテーマは、「企画をよりよくするために協力の仕方を学ぶ。」を掲げた。企画を実施するまでに、1年生から4年生までのすべての学年が役割を持つことが出来た。これは、企画ごとに設定した企画責任者を中心にメンバーへの作業の分配が出来ていたことに由来し、各自の進捗状況を確認し合いながら企画実施まで活動することが出来た。加えて、小指大縁日など、地域の方と会議を重ねたことにより、地域にとって求められる企画を実施できた。これらのことから、学生と学生、学生と地域の方という2つの協力の仕方を学ぶことが出来たと考える。

また、本プロジェクトは活動10年目に向けて、「3.11生活復興支援プロジェクト　活動10年史（仮称）」の制作を行っている。”地域に根付いた、学生と住民とが共同で行う復興を示す””将来起こりうる災害に対する復興のモデルとなる”を目的とし、2020年度までの活動をまとめあげていく。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	椿の植樹会	大船渡市役所の方の協力のもと、2018年に全区間開通した「結の道」沿いの環境を整え、継続的に歩きたくなるような道を目指すとともに、津波跡地の活用を進めるという目的で行われた。
6	NEVER FORGET 東北	築地よりみち館にて行われた、東日本大震災の復興支援団体が集まる「NEVER FORGET 東北」に出展した。本プロジェクトは、活動紹介パネル、活動写真、仮設集会施設「どんぐりハウス」の模型展示を行った。
8	夏のこども教室 〜Let's bamboo challenge！〜	大船渡市立越喜来小学校の児童を対象に”地元への愛着度向上””学年を超えたコミュニティ発展”を目的とし開催した。竹を使った工作・食・遊びを取り入れた企画を考案し、泊地区の魅力を再認識できる内容となった。
	小指大縁日〜令WA(和)もWA(輪)！夏の竹まつり！〜	小指地区の方々を対象に「小指大縁日〜令WA(和)もWA(輪)！　夏の竹まつり！〜」を開催した。小指地区の竹を使った水鉄砲工作、的当て、流しそうめんを企画し、大人から子どもまで楽しんでもらうことができた。
	結の道整備	昨年度に完成した、「結の道」の整備を行った。「結の道」は、津波跡地利用、津波到達ラインの可視化、避難経路の確保、次世代への震災の継承を目的としており、今後の結の道の活用方法に関する審議も行った。
	平塚市総合防災訓練	平塚市民を対象に平塚市が開催した「令和元年度平塚市総合防災訓練」に出展した。震災当時と現在の東北の様子やプロジェクトの活動を伝える写真の展示、リーフレットなどの活動紹介資料の配布を行った。
9	おきらいマルシェ （泊地区9月調査）	越喜来地区の活性化・魅力発信を目的に開催された。子どもを対象としたブースや越喜来で採れた海産物などを購入し、その場でBBQができるブースなどがあり、学生と住民の方が一緒に楽しめるイベントとなった。
11	建学祭	第65回東海大学建学祭にて、活動展示、岩手県の郷土料理である「ひっつみ汁」の販売を行った。活動展示では、合計で183人の方々にご来場いただき、東北の復興の様子を伝えることができた。
	大門市	平塚市の大門会主催の「第9回大門市」に参加した。小指地区の方から仕入れたわかめ、昆布、とろろ昆布、あぶりいわしの販売やパネル・テレビを使用した活動紹介を行った。
2	思い出を繋ごう	相川地区・小指地区を対象に「思い出を繋ごう」を開催した。地域の方に親しみを持った場所として小指観音堂を利用していただけるよう、地域の方と共に絵馬を作成し、掲示した。



▶ 夏のこども教室



▶ 小指大縁日



▶ 平塚市総合防災訓練



▶ 大門市

❹ 協力団体

大船渡市立越喜来小学校、特定非営利活動法人アーバンデザイン研究体、大船渡市農林水産部農林課、工藤静香、泊区自治会、下田奈祐、小指契約会、鈴木学、佐々木克彦、平塚大門会、平塚市災害対策課、平塚市ひらつな祭実行委員会、災害から明日を守る会、FM湘南ナパサ、ツクイ茅ケ崎室田

❺ メディア掲載・放映

6/5 FM湘南ナパサ「地震！その時あなたは…」（ラジオ）、6/6 湘南ケーブルネットワーク「地震！その時あなたは…」（TV）、8/9 東海新報（新聞）、2020/2/19 FM湘南ナパサ「ナパサで防災」（ラジオ）

DAN DAN DANCE & SPORTS プロジェクト

湘　南

達成目標　「する（踊る）」「観る」「支える」の人たちが集い
1000人以上が関わった公演を創りあげる

学びのテーマ　互いを理解し協力し合う能力を深める

リーダー	菊池裕太	工学部土木工学科	3年
サブリーダー	雨宮哲也	文学部ヨーロッパ文明学科	3年
広報リーダー	金岡佑眞	工学部原子力工学科	2年
会計	藤原信之	理学部化学科	3年
コーディネーター	三橋雅之	入学課	
アドバイザー	田巻以津香	体育学部生涯スポーツ学科	

（参加人数30名）

❶ 活動概要

ダンスなどの身体表現の魅力、素晴らしさを多くの人に伝えることで、地域や社会に貢献することを目指して活動している。そのために、「する（踊る）」「観る」「支える」仲間1000人以上が関わる公演を創り上げることを目標にしている。社会への貢献や目標の達成を行うには、地域や学内の様々な団体、人々と連携することが必要である。そのため、年間を通して様々な身体表現ワークショップの開催や、パフォーマンス披露などを行い、人との繋がりや、自身の能力を高めたうえで、DAN DAN DANCE&SPORTS公演を開催する。



▶ DDD第9回公演集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

4月の春の交流会では主に新入生を対象に身体表現による交流の場を設けた。プロジェクトを創る難しさや、特に活動を行う上で多くの準備が必要であることを学んだ。また、体育学部生涯スポーツ学科生と協力したことで、スムーズなワークショップ構成を学んだ。すなわち、「支える」能力の学びが多くあった。

6月にはキャンパスストリートプロジェクト主催のスターフェスティバルにて子どもを対象としてオリジナルのダンスを一緒に踊り、「する（踊る）」ことの楽しさを体感してもらうことを目指した。積極的な声掛けや誘導により振り付けを覚えてもらうことができ、参加者の子どもとその親御さんを中心とした地域の方々が手軽に身体表現を味わえる機会となった。ダンスを創作する難しさを学ぶとともに、仲間と考えたダンスで参加者を巻き込んで楽しませるという成功の体験を得ることが出来た。

10月のTOKAIグローカルフェスタではイベントを盛り上げ、プロジェクトの知名度を上げるという意図のもとにメンバーで考えたダンスを披露した。ダンスをメンバー間で考え、踊ったことで、相互理解を深められたとともに、身体表現を「する（踊る）」ことの楽しさを再確認すること、子どもから大人までの幅広い世代にダンスを「観る」楽しさを伝えることができた。

12月には、プロジェクトの達成目標を実感することが出来る集大成のイベントであるDAN DAN DANCE&SPORTS第9回公演を、「A Whole New World」をテーマに開催した。ダンスだけでなく、和太鼓や一輪車等、様々なジャンルのパフォーマンスを取り入れることで他にはない公演を実現することが出来た。過去の反省点や昨年度のアンケート結果を活かして、企画段階から公演時間を短くすることを心掛けたり、全員が準備から当日の作業において互いに協力でき、スムーズな会場設営・運営を行うことができた。協力し合い集うことの大変さを学び、学びのテーマである「互いを理解し協力し合う能力を深める」ことに近づけたと感じている。一方、広報活動が疎かになってしまったこと、出演団体へのオファーが余裕を持ってできなかったことなど、次年度へのつなげるべき反省として残った。

上半期、メンバー同士の連携がうまく取れず、イベントの担当者に作業が集中してしまったことで、情報の共有不足が起こってしまった。結果として、10月に開催予定であったイベントの中止を招いてしまい多くの方々に迷惑をかけてしまった。しかしながら反省会では活発に意見が飛び交い、この反省を次に活かそうというメンバーの気持ちを高める上で重要な機会となった。

今年度は達成目標に至ることはできなかったが、外部団体や委託業者、公演出演者を対象としたアンケートの感想から、身体表現の素晴らしさを多くの人に伝え、共有することが今年度の活動を通して達成できたと感じている。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	春の交流会	「新入生を対象として、メンバーとの交流及びプロジェクトへの勧誘を行う」ことを目的としダンス経験者でなくとも身体で表現することの楽しさが体験できるワークショップを開催した。
6	スターフェスティバル参加	キャンパスストリートプロジェクト主催のイベントに参加し、小学生以下の子どもを対象として曲にあわせたオリジナルの振りを来場者にレクチャーし一緒に踊った。
10	中間報告会	活動理念や活動を通しての学びについて、写真やポスターを使い報告をした。報告を聞いてくださった地域の方に、自分たちの活動を知ってもらい、興味を持ってもらうことで今後の活動に参加してもらうことを目指した。
	TOKAIグローカルフェスタダンス披露	メンバー全員でダンスを披露し、来場者にダンスの楽しさを分かち合い、イベントの盛り上げに貢献することが出来た。
11	建学祭	プロジェクトの外部の方に我々の活動を伝えることを目的に展示や模擬店を行った。展示では、写真やポスターを展示し、それに沿って直接活動目的や内容を説明した。
12	DAN DAN DANCE & SPORTS第9回公演	年齢やジャンルを超えた様々な身体表現パフォーマンスの公演。地域で活動するダンス・一輪車競技等のパフォーマンス団体や、プロの舞台製作業者、観客とともに舞台を創り上げ、年間達成目標を果たすことを目指した。
2	最終報告会	1年間の活動から得た学びを報告した。自分たちの活動を改めて振り返るとともに、他のプロジェクトの報告を聞くことで、活動に対する新たな発見や学びを得ることが出来た。



▶ 春の交流会



▶ スターフェスティバル



▶ 本公演企画



▶ DDD第9回公演

❹ 協力団体

クリエイティブアートスィンク 山本緩希、東海大学望星会舞台屋、藤森遥奈、渡部亜耶香（体育学部生涯スポーツ学科）、Makk Design、チアフルRG、明星大学Shakin key OVER、創作和太鼓集団　衆、MONA（一輪車パフォーマンス）、東海大学ダンス部MDC、LAダンススクール、湘南宝島ダンス、STUDIO BLACKN、M,Sベリーダンス、東海大学チャレンジプロジェクト・キャンパスストリートプロジェクト、東海大学チャレンジプロジェクト・Beijo Me Liga

❺ メディア掲載・放映

11/29　タウンニュース秦野版（WEB）

Beijo Me Liga

湘　南

達成目標　マルチカルチャーキャンプを開催し、より多くの外国にルーツを持つ子どもたちを招待する。また、外国にルーツをもつ方々に寄り添い、彼らが抱えている社会問題と向き合い、解決のためのお手伝いをする。

学びのテーマ　異文化理解の魅力を地域へ発信し、多文化共生を学ぶ

リーダー	山中大輝	工学部建築学科	3年
サブリーダー	近藤さくら	教養学部国際学科	2年
サブリーダー	枝吉航	教養学部国際学科	2年
広報リーダー	岡野佑亮	政治経済学部経済学科	3年
会計	久保田英莉	工学部建築学科	2年
コーディネーター	藤岡未妃	チャレンジセンター	
アドバイザー	小貫大輔	教養学部国際学科	

（参加人数98名）

❶ 活動概要

外国にルーツのある子どもたちを集め、互いの文化や価値観を尊重し合いながら楽しく過ごすマルチカルチャーキャンプを開催する。これを通して彼ら自身のアイデンティティを確立し、より明るく楽しい生活を送れることを目指す。より多くの子どもたちに参加してもらうために、各地にある外国人の学校やコミュニティのイベントをお手伝いし、繋がりを深めると共に広報活動を行う。



▶ マルチカルチャーキャンプ 集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

一年間を通しての私たちの達成目標は、海外にルーツを持つ子どもたちと集い、お互いの文化や価値観を尊重しながら、交流を深める事を第一に考えマルチカルチャーキャンプを開催し、マルチカルチャーキャンプを通して子どもたちが自身のアイデンティティを確立し、より明るく楽しい生活を送れるようにすることだった。今年度の活動の始まりとして、4月に愛川のブラジルコミュニティでのイースター祭があった。この活動では多くの新入生が参加してくれ、ブラジルにルーツを持つ子どもたちとたくさん交流し、大いに賑った。他のさまざまな活動にも、多くの一年生が参加してくれた。新たな活気により、素晴らしい形で交流できたとおもう。今年度8月のマルチカルチャーキャンプでは、ブラジル学校の子どもたちと先生に参加していただいた。しかし、参加者に偏りがあり来年度はその偏りを改善していく。他にも個人的に学校に遊びに行ったりなどメンバーの積極的行動が見られた。来年度の広報活動においては、今年度よりも早くマルチカルチャーキャンプの予定を事前に告知することにより、さらに多くの人が集まるように工夫していく。さらにホームページの見直しを行い、より良いものへと作成し直し海外にルーツを持つ人達にもわかりやすい形にしていく。そして来年度から始動できるようにしていく。以上が一年間の達成目標についての活動である。 次に、私たちBeijo Me Ligaの活動においての学びのテーマである。私たちは活動するにあたって様々なルーツを持った方々とお会いする機会が多いプロジェクトである。その活動をするにあたって学べることは無数にあると思っている。その中でも私たちが注目して学ぼうとしているところがいくつかある。これからのグローバル化社会や多文化社会が増える中、このようにプロジェクトの活動を通して人一倍そのようなシチュエーションに出会えている私たちがどのように対応していくか、また現在の日本ではどのような状況なのかを学び、活かしていくのかが私たちの活動においての学びのテーマとなる。私たちが行っている活動にどのような学びが得られるかを紹介していく。4月にはイースター祭というものがあり、主に在日ブラジル人コミュニティの子どもたちと日本にいてもブラジルでの文化を忘れないようにキリストの復活祭を行う。ここでは在日の外国人が故郷を忘れないためにイベントを開き子どもたちにも教える。それに参加することによって他の国ではどのようなことを行なっているか、また在日ブラジルと関わることによって日本がどのような対応を在日外国人にしてるかなどを学べる。これは、6月に行われるフェスタジュニーナというブラジルの収穫祭に参加するに当たっても同じような学びを得られる。また、8月に行われるマルチカルチャーキャンプではブラジル人学校の子どもや他のインターナショナルスクールの子どもたちを呼ぶことによって、さらに世界的にどのような現状なのかを知り様々なルーツの人と関わって多文化を直に感じられる。普通の人とは違いこのように様々な体験をできる私たちが1人でも多くこのようなテーマに沿った事を学べれば活動する意味があると思う。以上が活動においての学びのテーマである。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	イースター祭	愛川町のブラジルコミュニティの子どもたちとエッグハントやうさぎのお面づくりを行った。新入生も積極的に子どもたちと関わりたくさんの人とコミュニケーションを取ることができた。
5	新入生歓迎会	ブラジル式バーベキューのシュハスコをふるまった。アクティビティも数多く取り入れみんなで楽しむことができた。
	ひまわり訪問	群馬県にあるブラジル学校を訪問し、日本語教室を行った。平仮名とカタカナの習得と語彙力の向上を目的として、かるたやスタンプラリーを行い子どもたちが楽しみながら学べるように工夫した。
6	日伯学園 フェスタジュニーナ	日伯学園に訪問してブラジルの収穫祭であるフェスタジュニーナに参加した。子どもたちと踊ったり、魚釣りや輪投げなどのゲームコーナーのお手伝いをしたりして交流を深めた。
7	サッカー大会	日伯学園のサッカーチームを東海大学へ招きサッカー大会を開催した。スポーツという普段とは違った形の交流を通して、子どもたちと言語の壁を越えて仲良くなることができた。
	ポルトガル語 キャンプ	普段の活動で関わることの多いブラジルの人々とより多くのコミュニケーションを取るために、基礎的で実用的なポルトガル語を学ぶキャンプを行った。あいさつや自己紹介など今後の活動に活かせる知識を身に着けることができた。
8	マルチカルチャー キャンプ	様々な国にルーツを持つ子どもたちを対象に2泊3日のキャンプを大学で開催した。ものづくり、スポーツ、ダンスなどのアクティビティを企画し、普段できない体験や新たな出会いの場を提供することができた。
12	TS学園卒業式 日伯学園卒業式 オプソン卒業式	普段から交流のあるブラジル学校の卒業式に参加した。ブラジル学校の卒業式は賑やかな音楽や照明が使われていたり、ダンスや演奏があったりと日本とは違う形の卒業式で、異文化を知ることができた。



▶ マルチカルチャーキャンプ 巨大絵



▶ マルチカルチャーキャンプ スポーツ大会



▶ イースター祭



▶ イースター祭 ウサギ装飾

❹ 協力団体

ビオダンサ（内田佳子/小貫早苗）、学校法人ティー・エス学園、Eescola Alegria de Saber、日伯学園、Himawari Gakushu International School、Escola Opaco、Escola Sao Paulo

❺ メディア掲載・放映

なし

Tokai Dream Space Team

湘　南

達成目標　高校生、大学生、社会人、企業の連携で、ものつくりイベントを成功させる。

学びのテーマ　ものつくり、チームワーク、プロジェクトマネジメント、S&MA(Safty and Mission Assurance)

リーダー	田中亮	工学部精密工学科	2年
サブリーダー	倉田将志	工学部精密工学科	2年
サブリーダー	森田雄大	工学部精密工学科	2年
広報リーダー	飯田優子	工学部航空宇宙学科・航空宇宙学専攻	2年
会計	森岡雅晴	工学部航空宇宙学科・航空宇宙学専攻	2年
コーディネーター	喜友名浩史	企画広報課	
アドバイザー	岡田エ	現代教養センター	
	白澤秀剛	情報教育センター	

（参加人数44名）

❶ 活動概要

現在の社会では、挑戦しなおかつ失敗しないそんな人材が求められている。我々はこのような人材になるべく、小学生から社会人まで幅広い年代を対象とした、ものつくりイベントを開催することで、「S&MA」「プロジェクトマネジメント」「ものつくり」を学び、挑戦と高信頼性を実現するためには何が必要かを明らかにする。



▶ IWRC2019 集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

9月から12月にかけて、TDST主催のものつくりイベント「Intelligent Water Rocket Competition 2019（通称：IWRC2019）」を実施した。このイベントは中学生～社会人を対象にしており、全15チーム計40名の方々にご参加いただいた。IWRC2019は、参加チームが独自に設定したミッションを、ペットボトルロケットの打ち上げを通じで実施していただき、開発プロセスや当日の打ち上げ工程、ミッション達成度を総合して評価を行うコンペティション形式のイベントである。参加者の開発にはマイクロコンピュータを使っていただき、電子工作やプログラミングなど、日常では中々触れることのない分野に挑戦していただいた。当イベントにおいて、TDSTがイベント企画・立案、運営を行い、協賛企業が競技における採点基準の作成/当日の採点、開発備品の提供、ペットボトルロケット発射台の共同開発などを担当した。IWRC2019の活動はイベント企画・立案から打ち上げ当日まで約7ヶ月間の期間を要する。長期的な活動を行う上で必要なタスクや所要時間を見積もり、計画を立てながら運営できた。また、立てた計画を元に地道にタスクをこなして行くことができた。このことから、「プロジェクトマネジメント」の学びを実現できたと言える。また、イベントを通して「怪我人の出ないこと」を徹底した運営を行った。参加者に安全な開発を行ってもらえるよう開発の安全に関わる内容をまとめたマニュアルを作成・配布を行い、危機管理意識を持っていただけるような取り組みを行った。このことから、「S&MA(Safty and Mission Assurance)」の学びを実現することができたと言える。また、本活動を通して、「企業と連携し、中学生、高校生、大学生、社会人が参加するものつくりイベントを企画・実施し、成功させる」という目標を達成することができた。

8月5日に行われた、サイエンスコミュニケーター主催「世界一行きたい科学広場」において、「わくわく宇宙探検」という名称で地域の小・中学生へ向けた展示活動を行った。惑星探査をモチーフとしたプログラミングを学ぶことができるボードゲームのブースを用意し、体感してもらうことができた。子供たちはプログラミングに非常に強い興味を持っており、熱意を持って説明、体験を提供できた。

イベント当日は、ブースの管理役や説明役などの配置したり、シフトを組んで時間管理を行った。これによって、適切な人員配置や時間管理が徹底できるようになった。よって、当イベントでは「チームビルディング／チームワーク」「プロジェクトマネジメント」の学びを実現することができた。

プロジェクト内ではメンバーの技術力・マネジメント力向上を目的に、実践的ものつくり技術トレーニングプログラム（通称：PETプログラム）を実施した。本プログラムでは、新入生で数チームを編成し、チーム毎にミッション設定・開発・ペットボトルロケットの打ち上げを年３回実施し、チームの目標達成に必要な電子工作、プログラミング、データ解析、S&MA、マネジメントの技術を活動を通じて身につけてもらう。経験や技術力のある上級生が下級生に指導もあるが、新入生自身が計画を立ててチームでの開発を行った。まだ知らないことを調査したりトライアンドエラーを繰り返す中で技術力を身につけ、コミュニケーションをとりながら自発的にマネジメントを行えるようになった。このことから、「ものつくり」「チームビルディング／チームワーク」「プロジェクトマネジメント」の学びを実現できたと言える。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	新入生勧誘	ビラ配りとチャレンジプロジェクトの説明会、合同説明会、1号館説明会の参加を行った。
5	東公民館ペットボトル	秦野市東公民館と共催で、参加者の子どもたちがペットボトルロケットを製作し打ち上げるイベントを行った。
8	わくわく宇宙探検	サイエンスコミュニケーター主催の「世界一行きたい科学広場」で子ども向けにプログラミングを学べるボードゲームを行った。
9	IWRC2019競技説明会	競技大会の説明、協賛企業様とTDST OBによるパネルディスカッション、マイコンや開発キットなどの配布物の提供。
	IWRC2019 S&MA講習会	有人宇宙システム株式会社様による安全と確実なミッション達成についての講習会の実施。 安全に関する講習、開発やミッションにおけるリスクや対策を考える演習の実施。
11	建学祭の展示	TDSTの紹介、IWRC2019の概要、参加者の応援メッセージ、使用マイコンの展示、打ち上げ動画の上映を行った。応援メッセージでは来場者に参加者に対してメッセージを書いてもらった。
	IWRC2019 試験打ち上げ	参加者の製作中のペットボトルロケットの打ち上げを実施。
12	IWRC2019 競技大会	ペットボトルロケット競技大会の実施、表彰。



▶ オープンキャンパス ポスター展示



▶ IWRCでのロケット打ち上げイベント①



▶ IWRCでのロケット打ち上げイベント②



▶ IWRCでのロケット打ち上げイベント③

❹ 協力団体

特定非営利活動法人 日本ITイノベーション協会、有人宇宙システム株式会社、ルネサス エレクトロニクス株式会社、株式会社 アジャスト、株式会社 京樽、株式会社 映像センター、株式会社 IHIエアロスペース

❺ メディア掲載・放映

なし

Sunflower

湘　南

達成目標　シェムリアップの小学校の校舎建設のために必要な資金の調達及び現地の子供たちへの教育支援さらに、地域交流を通し私たちが活動で得た経験や知識などを多くの人に知ってもらう。

学びのテーマ　様々なことに挑戦する力や世界に通用するコミュニケーション力、自分の経験や知識を発信する能力を培う。

リーダー	高橋穂志	文化社会学部アジア学科	2年
サブリーダー	北岡明佑子	文化社会学部北欧学科	2年
広報リーダー	堤美月	文化社会学部北欧学科	2年
会計	濱中彩実	健康科学部社会福祉学科	3年
コーディネーター	関根広太	チャレンジセンター	
アドバイザー	杉本浄	文化社会学部アジア学科	
	妻鹿ふみ子	健康科学部健康マネジメント学科	
	竹内友章	健康科学部健康マネジメント学科	

（参加人数37名）

❶ 活動概要

Sunflowerはカンボジアのプノンペン及びシェムリアップでの活動と日本で募金や地域交流を主にしている。プノンペンでの活動では現地の学校と交流を目的としシェムリアップでは私たちと交流のある支援受給者と協力し現状調査、学校建設計画などを行う。日本での募金や地域交流を通して私たちの活動及びカンボジアの現状を発信していく。以上の活動から私たちは「子どもたちに夢を持ってもらう」ことを実現していく。



▶ カンボジアスタディツアー 集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

私たちは、『シェムリアップの小学校の校舎建設のために必要な資金の調達及び現地の子どもたちへの教育支援さらに、地域交流を通し私たちが活動で得た経験や知識などを多くの人に知ってもらう』を1年間の達成目標とし、『様々なことに挑戦する力や世界に通用するコミュニケーション力、自分の経験や知識を発信する能力を培う』を重視する学びのテーマとして活動してきた。

シェムリアップの小学校を建設するための必要な資金の調達として、計6回、募金活動を行った。募金活動では合計で約３０名参加した。またチャレンジセンターのジャンパーを初めて使用するほか、例年より多く行うことによって、建設費用を得ることが出来、地域の人々へ私たちの活動について発信した。

活動の発信として、カンボジアフェスティバルではチラシを置いてもらい、スターフェスティバルでの出展ではメンバーがそれぞれカンボジアの文化など概要について調べ模造紙にまとめてもらうなど、カンボジアのことを地域の方々に知ってもらうと同時に、私たちのスキルアップにもつながった。カンボジアフェスティバルではブース以外にも運営ボランティアとして約10名参加した。スターフェスティバルでは約20名の親子がブースに来てくださりヘナタトゥーなどを体験した。

夏にはスタディツアーを行い11名参加した。スタディツアー中では、様々な学びを得ることが出来た。具体的には子どもたちの知的好奇心を膨らませるために、Sunflowerのオリジナルかるたを作成し、子どもたちとの交流に使用しプレゼントした。これは、クメール語、英語、日本語とイラストを合わせたカルタで、子どもたちに身振り手振りを使って、遊び方を伝授した。日本の伝統遊びを伝えるほかに、子どもたちに国語だけでなく、外国語に触れてもらうという学習支援につながった。また、子どもたちからは、カンボジアの伝統的な遊びを教えてもらい、異文化交流をすることが出来た。更に、それぞれがテーマを決め、調査したカンボジアのフィールドワークでは、渡航前から計画を立ててもらい、現地の人と交流を図り、視察などを行いメンバー一人一人が主体的に動いてくれた。スタディツアーでは、身振り手振りを使いながらも、母語の違う人々と意思疎通をするコミュニケーション能力と、見知らぬ土地で計画を立て調べてもらうという自ら考える力や挑戦する力を養うことが出来た。

加えて、スタディツアー後での建学祭や中間報告会では、フィールドワークの調査結果を発表してもらい、カンボジアの社会問題や現状について、渡航していないメンバーにも共有することが出来た。他にも建学祭ではカンボジア雑貨の販売やヘナタトゥー体験など、カンボジアの文化を来場者に身近に感じられるような企画を考え、実行した。

今年度では、チャレンジプロジェクトに採択され、カンボジアフェスティバルやスターフェスティバルの出展、参加またスタディツアーでの孤児院訪問など、新しい活動が大きく加わった。それによって、新しいことに挑戦していく力や、自ら考える力につながり、メンバー間で協力し行うことにより、集い力を養うことが出来たと考える。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	募金活動	新百合ヶ丘駅で開催。募金活動を通して地域との交流と学校建設の資金の調達を目的として行った。自分たちの経験や知識などを日本の多くの人の知ってもらい、私たちの活動とカンボジアの現状などを知ってもらうことが出来た。
5	カンボジアフェスティバル	日本に住んでいるカンボジア人との交流と他のカンボジアを支援している団体の交流を目的としている。実際に現在カンボジアで何が起きているかなどを留学生から直接聞け、他団体からどのような支援をしたりアドバイスをもらうことが出来た。
	講演会	社会的課題や国際支援を身近に感じてもらうことを目的とした。実際に海外で支援をしている企業、NPO法人の代表たちを講師と呼び彼らの海外支援を目指した理由などを話してもらった。また、多くの大学生も講演会に用ぶことに成功した。
9	カンボジアスタディツアー	異文化理解とその接し方をテーマとし、「現地視察によるカンボジアの社会問題」と「現地交流による教育支援の現状」について調査することを目的とした。支援先の学校に訪問し子どもたちの交流を通しカンボジアの教育の現状を知ることができ、現地の人へのインタビューを通しカンボジアの社会問題を肌で感じることが出来た。これからのSunflowerの支援方針などに役立つ経験や知識、発見をスタディーツアーで得ることが出来た。



▶ 駅前での募金活動



▶ 講演会 これからのキャリア設計



▶ カンボジアフェスティバル



▶ カンボジアスタディツアー

❹ 協力団体

KHJ株式会社、NPO法人HERO、NPO法人World Theater Project、サガミホールディングス株式会社、カンボジアフェスティバル実行委員会、在日カンボジア王国大使館

❺ メディア掲載・放映

なし

Takanawa共育プロジェクト

高　輪

達成目標　他大学・他機関とも積極的に連携し、地域を活性化する

学びのテーマ　地域貢献を通してより良い地域社会を作る

リーダー	小坪聖明	情報通信学部経営システム工学科	3年
サブリーダー	原澤茉帆	情報通信学部情報メディア学科	3年
サブリーダー	佐藤慎治	情報通信学部経営システム工学科	2年
広報リーダー	青野歩実	情報通信学部情報メディア学科	3年
会計	本間貴大	情報通信学部情報メディア学科	3年
コーディネーター	河村裕文	高輪事務課	
	吉村敬太	高輪教学課	
アドバイザー	崔一煐	高輪教養教育センター	
	佐藤弘幸	情報通信学部通信ネットワーク工学科	

（参加人数52名）

❶ 活動概要

東海大学（高輪キャンパス）が高輪地区にとって必要な存在として認識してもらえるように、地域の様々なイベントに積極的に参加していく。また、イベントを企画・運営することや定期活動としてテニススクールや地域清掃などの貢献活動をすることで、日常的に地域の方々と交流をはかり、共に地域を盛り上げる。これら活動を通して大学と地域の良好な関係を築き「大学と地域の架け橋」になるよう継続的に活動する。



▶ 神輿担ぎ①

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

私達は今年度の達成目標を「他大学・他機関とも積極的に連携し、地域を活性化する」として1年間活動をしてきた。これは、昨年度は地域との繋がりを重視したため、他大学・他機関との繋がりを持つきっかけが作れなかったという反省から考えたものである。また、「地域貢献を通して、より良い社会を作る」が今年度の学びのテーマであった。これらの目標・テーマを達成するために私達Takanawa共育プロジェクト（TKP）は以下の活動を行ってきた。

一つ目は、定期活動である。私達は月に一度、地域清掃とテニススクールを行った。地域清掃は高輪警察署の方に協力していただき、大学周辺の清掃を行った。テニススクールは高輪キャンパスのテニスサークルと共同で開催してきた。これらの活動は、継続して続ける事でより地域の方々との交流を深めることができると考えている。

二つ目は、地域イベントの協力である。今年度も引き続き、地域イベントの協力やお手伝いを積極的に行ってきた。今年度は初めての試みとして、たかなわ子どもカレッジ様にご協力いただき、清水キャンパス訪問を行った。航海工学科の方々にもご協力いただき、「望星丸」の案内や水族館の見学をさせてもらった。同じ東海大生や世代が違う人との関わりをもつことで、地域の魅力を知ることができた。

三つ目は、主催イベントである。クリスマスイルミネーションや、建学祭での東海大神輿、子ども向けイベントなどがこれにあたる。クリスマスイルミネーションでは、自分たちでイルミネーションの電飾やクリスマスツリーを設置した。また、建学祭にて地域の神輿同好会の方々と共に東海大神輿を担いだ。一年に2回程、地域の小学生を対象に「謎解き宝探し2」や「TKP冬まつり」などのイベントを主催している。（「謎解き宝探し2」は、今年は感染症の影響により、中止となった）これらの主催イベントは、参加した子供達や、地域の方々の笑顔を見ることができる。また、自分たちで企画し成功させることで「自ら考える力」や「成し遂げ力」を身に付けることができた。また、主催イベントで地域の方々にお手伝いいただくことも多く、共に地域を盛り上げていくという意識を強く持って活動することができた。

四つ目は、広報活動である。今年度は、昨年度までにも行っていたHPや Facebook、掲示板での宣伝に加えて、Twitterでの広報活動も始めた。これは、学内の学生など若い世代に活動を知ってもらうことを目的としている。活動が終わり次第、HPやTwitterを更新するよう心がけている。実際に、私達の活動をTwitterを通して知ってくれた学生も多く見られた。

今年度は、多くの一年生がプロジェクトに参加したことで、これまでのプロジェクト活動で継承してきた考えを大切にするだけではなく、新しい視点から活動を捉え、取り組むことができた。新しい視点から取り組むことで、これまで困難だと考え実行に移せなかったことにも、解決策を見出す機会になると思う。一年間の活動を通じて学んだことを来年度の活動に活かしていきたい。また、それだけでなく、社会に出て活動していく中でも必要となるスキルを身につけていける活動にしていきたい。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	のれんノ市	メリーロード高輪で開催されるお祭り。準備から片付けまで行い、熊本震災復興支援活動として出店も行い、売上金を熊本県共同募金会に寄付した。
	浅草神社祭	高輪地区の神輿同好会「縄の会」の方々と一緒に、神輿を担がせていただいた。今年は「二之宮」を担ぐこともできた。"地域の方々と交流を深めること""日本の文化を再認識する"を目的に参加させていただいた。
7	七夕笹飾り	短冊の作成や笹の準備をTKPで行う。校内の三か所に笹を設置し、たくさんの学生に願いをかいてもらうことができた。
9	高輪神社例大祭	準備や当日の神輿担ぎに参加。周辺の町会の方々と担がせていただき、高輪地域全体を盛り上げた。
11	東海大神輿	高輪建学祭を盛り上げるため、TKP主催でたかなわ会、高輪神輿同好会、各町会に協力していただき学内に陳列している神輿を担いだ。
12	清水キャンパス訪問	高輪子どもカレッジと共同で、地域の小学生を対象に1泊2日の宿泊研修を行った。 東海大学が保有する望星丸や海洋博物館の見学を行った。 移動中や夜のレクリエーションを行った。
	クリスマス イルミネーション	TKP主催の一大イベント。クリスマスツリーや電飾を設置することで高輪キャンパスがより明るくなった。様々な学年の多くのメンバーに参加してもらうことができた。
	TKP冬まつり	TKP主催イベント。いくつかのゲームコーナーを回りパーツを集めることで、スノードームを作るという小学生を対象としたイベントを行った。
1	箱根駅伝応援カフェ	高輪いきいきプラザコミュニティーカフェforyouで行われた応援カフェ。選手を地域の方々と応援しながら、お茶やお菓子の提供。選手が近くに来たときは、沿道に出て目の前で応援した。



▶ のれんノ市



▶ 神輿担ぎ②



▶ 清水キャンパス訪問



▶ クリスマスイルミネーション

❹ 協力団体

メリーロード商店街、高輪台商店会、松ヶ丘町会、白金北里通り商店会、港区立たかなわいきいきプラザ、たかなわ会、高輪神輿同好会、港区立たかなわ子どもカレッジ、高輪子ども中高生プラザ、高輪地区総合支所、警視庁高輪警察署

❺ メディア掲載・放映

通年 プラたかネット（WEB）、5月 メリーロード高輪（WEB）

先端技術コミュニティACOT

熊　本

達成目標
ETロボコンチャンピオンシップ大会出場
ETロボコンやドローン訓練等で得た先端技術の
知識や技術で地域貢献をする

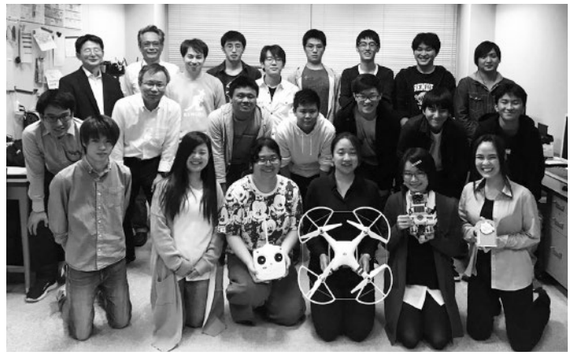
学びのテーマ
社会で求められる知識・技術に対する挑み力と社会に対する
コミュニケーション力を学ぶ

リーダー	野島明博	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	西口大嗣	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	宮崎優斗	経営学部経営学科	3年
広報リーダー	松田雄志	基盤工学部電気電子情報工学科	2年
会計	和泉田刀麻	基盤工学部電気電子情報工学科	2年
コーディネーター	福間恵	九州教学課	
	加藤潤一	九州教学課	
アドバイザー	中嶋卓雄	情報教育センター	
	松本欣也	基盤工学部電気電子情報工学科	
	村上祐治	基盤工学部電気電子情報工学科	
	阿久津雅子	基盤工学部電気電子情報工学科	
	八尋剛規	九州教養教育センター	

（参加人数25名）

❶ 活動概要

本プロジェクトを継続する目的は、ETロボコンに参加し、全国大会での上位入賞を目指すことで自らの技術を養い、技術支援等で地域に貢献することである。また、学外へ向けたものつくりや先端技術をもちいたイベントを開催、参加することで地域とのコミュニケーション力、さらにはメンバー間の連絡手段を使うなどして、これからの社会で使われるツールに対応できる能力を養うことである。



▶ プロジェクトメンバー集合写真

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

達成目標である「ETロボコンのチャンピオンシップ大会出場」については、まず、「ETロボコン九州北地区大会デベロッパー部門プライマリークラス」の総合優勝を目指し開発を行った。「ETロボコン」とは、日本の産業競争力に欠くことのできない重要な「組込みシステム」分野における技術教育をテーマに、決められた走行体で指定コースを自律走行する競技で、参加する全チームが同一のハードウェア(LEGO MindstormsTM)に、UML等で分析・設計したソフトウェアを搭載し競うコンテストである。主に夏休みを利用して開発を行い、九州北地区大会総合優勝を目指した。結果としては、九州北地区大会において「デベロッパー部門プライマリークラス総合3位」を受賞し、チャンピオンシップ大会への出場はできなかったが、学びのテーマである「社会で求められる知識・技術に対する挑み力」を培うことができた。

もう一つの達成目標である「ETロボコンやドローン訓練等で得た先端技術の知識や技術で地域貢献をする」については、ETロボコンの開発に取り組む際に学んだプログラミング技術やロボット制御の考え方を用いてNPO法人HITOプロジェクト様と協力し、ロボットスクールを開催したり、地域貢献活動を行った。また、ドローン訓練で得た技術については、空撮依頼を受け、空撮に出向き撮影した映像を編集し依頼者に提供する活動はもちろん、科学イベントに参加する際には、実際のドローン規制についての説明を行い、啓発活動を行ったうえで、ミニドローンで飛行デモや操縦体験を実施、空撮映像の放映など、社会に向けた活動に活かすことができた。これらの活動では、学外の方と打ち合わせを行ったり、参加者の方に活動内容を説明する等、メンバーそれぞれが地域の方々と積極的にコミュニケーションを取ることができ、「社会に対するコミュニケーション力を学ぶ」という学びのテーマを達成できたと考える。さらに、その他の活動として熊本県警・県内他大学と協力しての「サイバー防犯ボランティア」、各種大会の運営スタッフ、主催で開催したものつくりイベントなど、様々な地域向けの活動を行うことで、「ETロボコン出場やドローン訓練等で得た先端技術の知識による地域振興に貢献する」という達成目標を達成し、「社会に対するコミュニケーション力」を培うことができた。特に主催イベントの際には、地域の小学校との打ち合わせや参加者とのやり取りを通じて、学内だけでは経験することのできない、異業種・異世代の方とのコミュニケーションを多く取ることができ、参加者への責任感や主催イベントを開催させていただく上でどういったことが重要なのかを学ぶことができた。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	星翔高等学校人文字ドローン空撮	星翔高等学校からの依頼で1年生がグラウンドにて「令和」や「TOKAI」を人文字で作り、ドローン空撮を行った。
8	世界一行きたい科学広場inくまもと2019	熊本キャンパスで開催された本イベントににてロボットプログラミング・キネクト体験ブース・ドローン飛行デモの3ブースを担当し、それぞれのブースで来場者に楽しんでもらえるための活動を行った。
	阿蘇火山博物館創立祭	阿蘇火山博物館創立祭が開催され、ACOTは活動紹介やレゴロボットプログラミング教室・天体観測を行った。天体観測は雲が濃くて星空を眺めることはできなかったが、星空の説明を来場者の方々に行った。
9	ロボットスクール #1～#4 (9/28から計4回)	特定非営利活動法人HITOプロジェクト様主催のロボットプログラミング教室に講師・スタッフとして参加した。モータを回転、ライントレースをするなどのプログラミングを小学生を対象に教えた。
	ETロボコン 九州北地区大会	8月から本格的に開発に取り組み、本大会に出場した。結果として、九州北地区大会デベロッパー部門プライマリークラス総合3位受賞となった。
11	「おいでよ！九電科学研究所」ブース出展	九州電力で行われたイベントにACOTも展示スタッフとして参加し、レゴロボット教室やキネクト体験ブース、静電気クラゲの3ブースを展開して行い子どもたちに楽しんでもらった。
12	サイテク祭	メカトロマイスタープロジェクトと協力しての参加となった。ACOTではドローン展示・操縦体験、空撮動画放映、LEGOロボットプログラミング教室を行った。
	クリスマスイベント	熊本地域プロデュースプロジェクトと共催し、大学近辺の児童を対象としたクリスマスにちなんだもの作りを体験してもらうイベントを実施した。ACOTではスライム作り・クリスマスリーフ・ツリー・ドローンデモ飛行・LEGOロボット操縦体験のブースを展開した。
	くまもとお仕事体験フェア	グランメッセで開催された「お仕事探検フェア」にブース出展を行った。高校生を対象としたイベントで、ACOTの活動周知と共にVR体験ブースを設置し興味を持ってくれた生徒に詳しく説明を行った。



▶ 星翔高等学校人文字ドローン空撮



▶ ロボットスクール#1～#4



▶ ETロボコン九州北地区大会



▶ クリスマスイベント

❹ 協力団体

特定非営利活動法人HITOプロジェクト、熊本県警、東海大学付属熊本星翔高等学校、田舎の体験交流館さんがうら

❺ メディア掲載・放映

4/25 TKUライブニュース、10/17 T1Park(Web)、2/1 T1パークマガジン

メカトロマイスタープロジェクト

熊　本

達成目標　WORLD GREEN CHALLENGEソーラーカーレース総合優勝、レスキューロボットコンテスト本選出場、ものつくり教育の促進及び、地域貢献活動を活発に行う。

学びのテーマ　目標達成のための効率良い工程管理やチームマネジメント能力を学ぶ。

リーダー	山口大貴	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	宍戸優華	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
サブリーダー	八木一師	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
広報リーダー	中島直人	基盤工学部電気電子情報工学科	2年
会計	藤沢健	基盤工学部電気電子情報工学科	3年
コーディネーター	六嘉孝裕	教学部九州教学課	
	高橋大優	教学部九州教学課	
アドバイザー	高橋将徳	電気電子情報工学科	
	清田英夫	電気電子情報工学科	
	佐松崇史	電気電子情報工学科	

（参加人数21名）

❶ 活動概要

近年の目立った地震などの自然災害や化石エネルギー資源の目途が立っている中、自然的問題及び社会的問題に対して工学的な知識を交えて、新しい発想や考えを育むことを目的としている。又、基本的なPDCAサイクルを実践していくことにより、活動をどのように動かしていくかを個人らが考え実行していく活動を目指していく。



▶ レスキューロボットコンテスト本選①

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

メカトロマイスタープロジェクトはロボットチーム、ソーラーカーチームともに、近年の目立った地震などの自然災害や化石エネルギー資源の目途が立っている中、自然的問題及び社会的問題に対して工学的な知識を交えて、新しい発想や考えを育むことを目的としている。又、基本的なPDCAサイクルを実践していくことにより、活動をどのように動かしていくかを個人らが考え実行していく活動を目指し一年間活動を続けてきた。実際にロボットや、ソーラーカーを製作するにあたり、目標達成のための効率の良い工程管理やチームマネージメント能力が必要となり、これらを突き詰め実践していくことで、今年は去年からの目標であった「レスキューロボットコンテスト本選出場」及び「ワールドグリーンチャレンジクラス内優勝」を両チームともに達成することができ、「地域貢献活動への積極的な参加」も今年は例年に比べ非常に多くのイベントに参加することができ、地域活性化に対し工学的分野で寄与することができた。ここでは、これら3つの具体的な紹介を学びを踏まえ報告していく。

1つ目の「レスキューロボットコンテスト本選出場」について説明する。この大会は今年で19回目の開催となり毎年神戸で行われる大会で、地震の被害にあった市街地を模擬した実験フィールドにおいて、要救助者を模擬した人形（ダミヤン）を救助ロボットにより安全かつ迅速に救助することを目的にした競技である。ロボットチームは今年もこの大会に参加し、今までどのチームも取り入れていない冗長性という概念をソフト的にもハード的にも取り入れ、ロボットが物理的要因により本来の目的が遂行できない状況に陥っても、目的を遂行することのできる健全性が評価され、知識とアイデアで本選に行くことのできるチャレンジ枠を勝ち取り本選に出場することができた。又、予選ではなしえなかったダミヤン救出を本選では達成でき、健全性及び実際に救出できるだけの性能を実証することができたため、チームの技術力向上とロボットの飛躍的な性能向上を達成できた。

2つ目の「ワールドグリーンチャレンジクラス内優勝」については、秋田県大潟村で毎年行われるワールドグリーンチャレンジにおいて、今年もソーラーカーチームが参加しアドベンチャークラス優勝及び総合2位という成績を残した。この背景には、企業との連携開発により実現した、走行中のマシンデーターをピットからモニタリングすることのできるテレメトリーシステムの構築が大きく、これによりより実践的な効率の良いエネルギーマネジメントシステムを行うことができたことにある。そのため、マシン性能を限界まで効率よく引き出すことができ、チーム内の技術的知識向上と企業との連携関係が非常に大きく成長した年となった。

3つ目の「地域貢献活動への積極的な参加」は、地元で行われるイベントに積極的に参加し、ロボットやソーラーカーを用いて工学的な知識を、多くの子どもたちに体験し知ってもらうことができた。そのため理科離れに対し、ものつくりの楽しさや理系への興味を引き出すことができたのではないかと考える。

最後に、残念ながら今年でメカトロマイスタープロジェクトは活動終了となってしまうがこれらの結果は、地域・企業並びに関係者の協力あってこその結果だと感じている。このことを忘れずに、これまで培った知識をこれからに生かせるようメンバー間では努力を続けていきたいと考えている。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	新入生歓迎会	主な活動概要と技術説明
6	第19回レスキュー ロボットコンテスト予選	岡山で開かれるレスコン予選に参加
8	世界一行きたい科学広場 inくまもと 2019	ロボットやソーラーカーの展示
	World Green Challenge出場	秋田県大潟村開催の大会に出場
	第19回レスキュー ロボットコンテスト本選	神戸で開かれるレスコン本選に参加
11	九州電力イベント	九州電力でのイベント参加
12	熊本お仕事探検フェア	高校生を対象としたイベントへ参加（ロボットチーム）
	サイテク祭	多良木町で開催される子ども向けイベントに参加（ロボットチーム）
	パレアわくわくフェスタ	幼児向や子ども向けイベントに参加（ロボットチーム）



▶ レスキューロボットコンテスト本選②



▶ レスキューロボットコンテスト本選③



▶ 九州電力イベント

❹ 協力団体

株式会社システムフォレスト、アール・アンド・アールコミュニティー

❺ メディア掲載・放映

なし

阿蘇援農コミュニティープロジェクト

熊　本

達成目標　農家さんの作業負担軽減及び学生の農作業関連技術の体得及び熊本県の農業への貢献

学びのテーマ　熊本県の農業の活性化に寄与

リーダー	美濃部星矢	経営学部経営学科	2年
サブリーダー	河井大明	農学部応用植物科学科	2年
サブリーダー	朝比奈諒	農学部応用植物科学科	2年
広報リーダー	黒木伸哉	農学部応用植物科学科	2年
会計	中川啓也	農学部応用植物科学科	2年
コーディネーター	高橋誠二	九州教学課キャリア就職担当	
	馬原賢信	九州教学課教務担当	
アドバイザー	阿部淳	農学部応用植物科学科	

（参加人数113名）

❶ 活動概要

現在進行形で農業人口の減少が起こっており、熊本県でもその傾向がある。農業人口の高齢化により、農業をやめてしまったり、身体の変化によりしたくてもできない方もいる。そこで我々プロジェクトは農家さんの負担軽減及び、手伝うことで熊本県の農業への貢献と活性化を行い、講義では学べないアグリフィールドに出て実際に農作業を行い、技術体得を目的とし、日々活動を行っている。



▶ イチゴの芽かき作業

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

当プロジェクトの1年間の達成目標は農家さんの作業負担軽減及び学生の農作業関連技術の体得及び熊本県の農業への貢献である。まず最初に農家さんの作業負担の軽減についてであるが、農家さんの繁忙期のときの収穫作業や芽かきなど直接的に作物を取り扱ってきたり、また肥料であったり雑草を抜いたり、マルチの準備など間接的に作物に対し関わり、体力面での農家さんの負担を軽減することができた。次に学生の農作業関連技術の体得であるが、我々阿蘇援農コミュニティープロジェクトは農家さんへ赴く時などただの労働力としてではなく、農家さんからは今まで培ってきた様々な知識や経験を教えてもらい、また我々は労働力と若さや元気を農家さんへ提供するといったお互いの利害関係の一致によりプロジェクトが成り立っている。この1年間を通して様々な種類の援農活動を行ってきたためあらゆる農業分野に対しての知識が身につき、それが阿蘇援農コミュニティープロジェクトに参加している学生の自信にもつながっている。これらのことにより我々は4つの力である挑み力と成し遂げ力を体感することができた。最後に熊本県の農業への貢献であるが当初、阿蘇援農コミュニティープロジェクトは外部の新規農家さんの受け入れが難しく、内部のモニター農家さん達に対してのみ援農活動を行ってきたが、我々東海大学の農家さんのコネクションだけでは様々な種類の援農活動を行うことができなかったため、今年度より初めて、阿蘇キャンパスがあった南阿蘇村と東海大学、阿蘇援農コミュニティープロジェクトが連携し、今まで単発でしか行くことのできなかった援農活動が連携することにより、1年間という単位でのスケジュールの作成に成功し援農活動の機会が増えた他、今までやってきたことのない分野、例えば牛や林業などにも気軽に参加できるようになり、我々の活動の可能性が大いに拡大した。また数年前に熊本地震が発生し、南阿蘇村やその他の地域、特に阿蘇キャンパスに亀裂が入り、阿蘇キャンパスで学生生活を行うことが困難となり、キャンパスを阿蘇から熊本市内へ移したため、南阿蘇村の人口が減り、若者の活気や南阿蘇村で援農に関わる機会がなくなったため、今回の役場との関係は阿蘇援農コミュニティープロジェクトないし、東海大学には大きな利益になり得ると考える。この1年間の活動を通して我々の活動は援農活動という農家さんの負担を軽減を負担するだけでなく、高齢になった農家さんを元気付けたり、また我々の活動が地域貢献になっていることに改めて気付き、当プロジェクトが活動する意味を実感することができた。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
5	葡萄	葡萄の芽かき作業
	アスパラガス	アスパラガスの摘芯作業
6	イチゴ	イチゴの芽かき作業
	新入生歓迎会	新入生歓迎会にてBBQ
8	交流会	南阿蘇村役場主催で阿蘇援農コミュニティープロジェクトと南阿蘇村農家さんと交流
	トマト	トマトの収穫作業
	トルコギキョウ	トルコギキョウの植え付け作業
11	調印式	調印式にて阿蘇援農が参加
12	サトイモ	サトイモの収穫
	ネギ	ネギの収穫



▶ アスパラガスの摘芯



▶ トルコギキョウの植え付け作業



▶ サトイモ収穫①



▶ サトイモ収穫②

❹ 協力団体

団体：南阿蘇村役場

個人：菊鹿町 小林様、阿蘇市 田嶋様、南阿蘇村 野田様、南阿蘇村 山田様、南阿蘇村 山室様、西原村 山下様、阿蘇市 藤原様、南阿蘇村 後藤様

❺ メディア掲載・放映

8/10 熊本日日新聞（新聞）、1/10 読売新聞 共同通信社、2/4　朝日新聞 NHK

阿蘇は箱舟プロジェクト

熊　本

達成目標　オオルリシジミやモートンイトトンボを含む絶滅危惧動植物が多く生息する阿蘇の草原環境の維持と熊本地震により衰退した放牧農家の復興・管理支援を行う

学びのテーマ　保全活動を通じて広報活動、計画力の重要性を学ぶ

リーダー	本田将大	農学研究科農学専攻	2年
サブリーダー	金子拓未	理学部情報数理学科	2年
サブリーダー	新田裕之	農学部応用植物科学科	4年
広報リーダー	中内拓海	農学部応用植物科学科	4年
会計	永野智大	農学部応用植物科学科	4年
コーディネーター	金子博	阿蘇実習センター	
	千々岩有紀	九州教学課	
アドバイザー	村田浩平	農学部応用植物科学科	
	岡田工	現代教養センター	

（参加人数119名）

❶ 活動概要

全国的にも貴重かつ固有の動植物が生息する阿蘇地域は、熊本地震からの復興の途上にある。本プロジェクトは、オオルリシジミをはじめとした阿蘇地域に生息する絶滅危惧種の生息環境の保全に取り組むとともに同地域の放牧農家を支援することで環境の保全と地震からの復興を目指すものであり、地域の方々と一緒に生物多様性の豊かな阿蘇を後世に残し伝えることを目的として活動するものである。



▶ 不法採集防止パトロール①

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

本プロジェクトは、オオルリシジミを初めとした阿蘇地域に生息・自生する絶滅危惧種の生息環境の保全活動に携わることで広報活動や計画力の重要性を学ぶことを目的として活動した。

阿蘇地域における希少動植物の生息環境の維持と復元を目的とした除草活動や不法採集者防止のためのパトロール活動は例年通り行った。今年度は、除草活動を春と秋に合わせて3回実施し、秋に除草活動を実施した草原は熊本地震後、組合員の離農等による人手不足により野焼きを実施できていない地域であり、野焼きの代わりに除草活動を実施した。このことから、本プロジェクトが阿蘇の自然を後世に伝えるためにできることを再確認した。

本プロジェクトは熊本地震後、活動の拠点を阿蘇校舎から熊本校舎に移し活動を行っている。そのため、阿蘇と関わる機会が減少し阿蘇の自然や阿蘇地域について学ぶ機会が減少している。今年度は復興支援の一環として、南阿蘇村（旧農学部学生街）で昆虫展を実施した。本プロジェクトでは、展示物の準備として阿蘇に関するポスターを製作することで阿蘇の動植物についての理解を深め、運営面ではメンバーが常駐して来場者に標本や活動について解説を行うことで、地元の方々と話す機会となり、阿蘇の自然や阿蘇地域への理解を深めることができた。昆虫展の広報活動として会場周辺の住宅を一軒一軒訪問し、企画の趣旨を説明し、興味を持っていただき来場者数の向上に努めた。また、昆虫展について新聞4紙に加え、テレビやラジオで掲載・放送され、開催期間中のFacebookでの投稿は、5000人以上に閲覧されるなど、本企画の注目度の高さが見受けられた。さらに、開催期間中に実施したアンケートから地域別来場者を分析すると、来場者は熊本県が169名、熊本県を除く九州から33名、九州外から24名と日本各地から昆虫展に足を運んでいただき、広報活動の重要性を学んだ。

今年度は新規イベントが多く、熊本校舎では昆虫展の他、九州電力の主催するイベントに出展し、湘南校舎ではギフチョウの保護活動に参加した。九州電力が主催するイベントへの出展では、昆虫の標本やプロジェクト活動の概要ポスターを展示した他、小学生を対象とした昆虫クイズを実施した。本企画は、初めての催しであったため、準備手順を確認できるように手順書を作成し、併せてスケジュール表を作成することで準備を円滑に進める工夫をした。さらに、展示物の準備では、役割ごとにグループを作り学生間の距離を縮め、個人の役割を明確にすることで円滑な準備を進めた。

湘南校舎の学生が今年度初めて参加したギフチョウの保護活動は、ギフチョウの観察や生息環境の整備などを行った。ギフチョウは、里山環境に生息しており里山の荒廃や開発などにより生息環境が減少し、絶滅が危惧されています。このことから、ギフチョウの保護活動に参加することは、人の営みと深く関わっている生物の保護活動の重要性を学んだ。さらに、昨年度に引き続き、今年度も湘南校舎の学生が阿蘇でのパトロール活動に参加したことで、阿蘇での保全活動の経験をギフチョウの保護活動や広報活動にも活かせている。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4 5	ギフチョウ 保護活動	本活動は，今年度初めて実施した活動であり「しのはら ギフチョウを守る会」が主催するギフチョウの保護活動に湘南校舎のメンバーが参加した。活動内容は、ギフチョウの観察や生息環境の整備、パトロール活動などである。
4 5 6	不法採集防止 パトロール	不法採集者から阿蘇の希少な動植物を守るため、パトロール活動を実施した。本活動は、オオルリシジミの発生時期に合わせ、4月に3回、5月に17回、6月に1回の計21回実施し、63名のメンバーが参加した。
4 5 8	昆虫展	南阿蘇村の旧長陽西部小学校で昆虫展の準備・運営を行った。昆虫展では、阿蘇の昆虫のポスターや旧農学部学生街のジオラマ、昆虫標本を約2,000種類展示し、合計30日間の開館で来場者は1,000名を超えた。
5 6 9	除草活動	阿蘇地域の草原に生息・自生するの生物の保全を目的として、生息環境の維持・復元を目的に3回の除草活動を民間ボランティア団体と共同で実施した。また，9月には早春に野焼きを実施しない草原において野焼きの代わりに除草を行った。
6	くまもと環境賞受賞	「くまもと環境賞」を受賞した。この賞は、環境の保全・創造に関する活動に顕著な功績があった人々に熊本県が贈る賞である。今回の受賞はプロジェクト発足から7年間の保全活動が評価され、受賞に至った。



▶ 不法採集防止パトロール②



▶ 昆虫展



▶ ギフチョウ保護活動



▶ 除草活動

❹ 協力団体

水源の森林ボランティアネットワーク、しのはらギフチョウを守る会、九州電力株式会社、熊本県警察高森警察署

❺ メディア掲載・放映

4/21 朝日新聞（新聞）、4/22 熊本日日新聞（新聞）、4/26 読売新聞（新聞）、5/24 朝日新聞（新聞）、6/20 熊本日日新聞（新聞）

あにまるれすきゅープロジェクト

熊　本

達成目標　譲渡会や啓発活動などを通して犬や猫を捨てる人を減らして殺処分数を減らしていくこと。さらに、プロジェクトメンバー、動物を飼っている人、飼おうとしている人、子供たちにも、日本の殺処分の現状を知ってもらうことで命の尊さを理解してもらうことである。

学びのテーマ　人から離れてしまった犬や猫に触れ合うことで命の尊さを感じること

リーダー	小川紘司	農学部応用動物科学科	3年
サブリーダー	古田芽衣	農学部応用動物科学科	3年
サブリーダー	安増ひかり	農学部応用動物科学科	3年
広報リーダー	江草なな子	農学部応用動物科学科	3年
会計	北尾水咲	農学部応用動物科学科	3年
コーディネーター	佐藤良彦	九州事務課	
	神鷹孝至	農学教育実習センター	
アドバイザー	森友靖生	農学部応用動物科学科	

（参加人数60名）

❶ 活動概要

本プロジェクトは、愛護団体の犬猫のお世話を活動の中心としている。また、命の大切さを知ってもらうために動物に関するクイズや紙芝居を作って読み聞かせをしている。そのほかに、SNSでの啓発活動や里親募集、譲渡会等のイベントの手伝い、各イベントでの募金活動や学内で集めた物資の寄付を行っている。このように、殺処分の数を減らし、各愛護センターや愛護団体さんの負担を減らすための活動をしている。



▶ お散歩ボランティア

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

私達は、学びのテーマである「命の尊さを感じること」を活動の中で感じることで殺処分や捨てられた犬猫の現状にメンバーが興味を持ち、啓発活動の更なる拡大化などを目標とした。

本年度の活動としては、前年度から引き継がれている動物愛護団体フィリアによる譲渡会の参加、動物愛護団体きずなの丘のお手伝い、熊本県・市愛護センターのイベントの手伝いなどがある。そして、本年度からの活動として、株式会社大劇のシェルターでの手伝い、新しいフェスへの参加がある。これらの活動の増加は、メンバーがさまざまな体験をすることで、命の尊さを多様な視点から考え感じることができたと考えられる。この中でも、譲渡会は飼い主のいない犬・猫に新しい飼い主を見つけ1匹でも多くの犬・猫が幸せな家族に恵まれることを信じて、毎月行われ少しずつ譲渡することができている。その結果、熊本県での返還率・譲渡率は高く、処分率も減ってきている。私達も譲渡率などに貢献していこうとを考えSNSを用いた啓発活動で新しい飼い主をTwitterやInstagramで見つけることができるのではないかと考え、本年度から里親募集を行っている。現在は試作段階のためあまり成果が出ていないが、今後の活動を行っていく上で多くの人の目に触れるように広めていけるようにしていきたいと考えている。このように、私達にできることを探し挑戦することを本年度のプロジェクトでは行っており、メンバーの自由な発想力と行動力を伸ばすことができたと考えられる。また、本年度は阿蘇くまもとシェルターが終了となり、地震によって被災していた犬猫たちが元の飼い主や新しい飼い主へと返還または譲渡することができた。この場所は、昨年度まで私達がボランティアに行っていた場所であり、このように犬・猫のシェルターが少しずつでも減っていくことは私達にとっても良い報告であり、また新たな活動をすることができるようにもなるため、一つでも多くの保護施設が終了になることが私達の活動の目標達成に大きく繋がっている。しかし、世の中にはペットが捨てられていたと言うニュースは後を絶たず、動物愛護センターにも飼いきれないと言う理由から引き取って欲しいと言う依頼が来ている現状もある。そんな飼い主の意識を変え少しでも無駄な命を増やさないことも私達の活動の一つである。そのため、今後の活動についても新しくしていく必要があると考えられる。私達が取り組んでいる問題はすぐに解決するような問題ではなく、地道に積み上げていかなければならないためこれからの活動も継続していきたいと考えている。最後に、今年度の活動に協力していただいた団体や個人の方々、今年度一年現場で活動を行ってくれたメンバーによって本年度の活動も充実したものとなったことに感謝すると共に、継続していくことの大切さを学ぶことができたのである。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
4	熊本県愛護センター訪問	新しく入ってきた新入生に本プロジェクトの活動内容を知ってもらうと同時に、熊本県動物愛護センターの状況を実際に見ることで、今後どのように活動に参加していくかを考えさせる活動である。
	きずなの丘	保健所などから預かっている犬をドックランで遊ばせることで犬たちのストレス軽減の活動を行ったり、施設の人だけでは普段することのできない掃除などをお手伝いすることで施設の人のサポートをしている。
5	譲渡会	飼い主がいなくなってしまった犬・猫達に新しい飼い主を見つけるために譲渡会に参加してくださった人と話したり、その会場の準備を行って少しでも犬や猫の譲渡先が決まるようにお手伝いしている。
9	熊本市愛護祭り	熊本市動植物園で行われた愛護祭りであり、祭りブースの設置の手伝いから、迷子札の作成、迷子のわんちゃんを探せのコーナーの担当を行い子どもや親御さんに迷子札やマイクロチップの大切さを説明する。
11	熊本県合同譲渡会	私達の活動のポスターや動物愛護に関するポスターを掲示することの啓発活動を始めとし、イベント自体の受付や会場の設置や片付け、各愛護センターの飼育の手伝いを行った。



▶ 熊本県愛護センター訪問



▶ きずなの丘



▶ 熊本市愛護祭り



▶ 熊本県合同譲渡会

❹ 協力団体

熊本市動物愛護推進協議会、熊本県動物愛護推進協議会、熊本県愛護センター、熊本市愛護センター、動物愛護団体フィリア、阿蘇保健所、動物愛護団体きずなの丘、ビックベア動物病院長　長尾孝之、阿蘇復興への道プロジェクト、くまもと犬チーム、株式会社大劇、ジョートフル、熊本県庁、九州電力、PIACK

❺ メディア掲載・放映

なし

札幌ボランティアプロジェクト

札　幌

達成目標　従来の活動を確実に遂行する。除雪本番時期までにメンバーのモチベーションを保つ施策を行い、主体的なメンバーを確保しつつ、昨年度の除雪依頼件数を超える数の除雪活動を行う。

学びのテーマ　地域の需要を知り、地域に根差した活動を行う。

リーダー	黒野春華	国際文化学部地域創造学科	2年
サブリーダー	大黒滉平	生物学部海洋生物科学科	2年
サブリーダー	黒崎菜摘	生物学部海洋生物科学科	2年
広報リーダー	田中元晴	生物学部生物学科	2年
会計	小川暁史	生物学部海洋生物科学科	2年
コーディネーター	松島佑介	札幌教学課	
	番場浩	札幌教学課	
	鈴木啓司	札幌教学課	
アドバイザー	植田俊	国際文化学部地域創造学科	
	田川正毅	国際文化学部デザイン文化学科	

（参加者数27名）

❶ 活動概要

当プロジェクトが毎年行っている自力で除雪できない高齢者宅での除雪活動は、地域にとって不可欠なものになりつつある。そのため2019年度も除雪活動をメインに据え、夏場は地元南区のボランティア活動に参加し地域住民との関係づくりに力を入れ、冬に向けてプロジェクトの周知と地域との交流を深めていきたい。祭りの運営や清掃活動などの様々な需要があり、地域に根差した活動を行うことで地域に貢献する。



▶ 除雪作業

❷ 一年間の達成目標と学びのテーマに対してどのような活動を行い、どのような学びがあったか

「従来の活動を確実に遂行する。除雪本番時期までにメンバーのモチベーションを保つ施策を行い主体的なメンバーを確保しつつ、昨年度の除雪依頼件数を超える数の除雪活動を行う。」を１年間の達成目標に設定した。この目標に対して役員の２年生は主に１年生のモチベーションを保てるように様々な角度から施策を行った。ここでいうモチベーションとは除雪のみに対するものではなく、ボランティア活動全体におけるモチベーションを向上をさせるという意識のもと取り組んだ。具体的には、除雪以外のボランティア活動を行う際、企画のミーティングの段階での１年生の参加、あるいは、１年生のみで作業をしてもらうことで実際に経験できる取り組みを行った。また、除雪の時期には、依頼者へアポイントメントの電話をする際や、実際に上級生と一緒に世帯訪問をして、除雪における手続きを行うなどといった、学生と地域社会との関わり方を実際に見たり経験してもらうような場も数多く設けた。これらは１年生が今後のプロジェクト活動に参加するにあたり、ボランティア活動を実際に行うためにはどういった過程や手続きが必要であるかを実際に身にもって体験してもらい、それらを通して得たものをどう活かしていくのかを主体的に考えてもらうことが狙いである。このように様々な取り組みを行いモチベーションの維持を図ったことにより、実施した各プロジェクトでの１年生の参加率は８割を超えた。次年度は新たな取り組みを考え、参加率を上げるようにする。また、既在のメンバーに対しては、日常的にみんなで集まるといった交流の場を設けた。この場を設けたことにより、細かい情報交流を行えるようになり、各プロジェクトを円滑に行うことができた。　次に、除雪活動を通して、自分たちで募集から手続き・活動を一通り行うことで、マネジメントで必要な力を身につけることができた。また、地域の方々から「毎年助かっている」といった感謝の言葉をいただいた際には、札幌ボランティアプロジェクトの活動が、地域貢献に繋がってきていることを感じることができた。しかし、除雪依頼件数については、結果的には目標を達成することができなかった。原因としては、募集方法である回覧板をとっていないという世帯が増えていることや、除雪活動をしていることを知らない人が多いことである。メディアを通して知り、依頼してくださる方もいたが、それだけではなくポスターを作り広告するなど別の方法を考える必要があると痛感した。また、今年は降雪量が激減したことも原因として挙げられる。そのため、過去の反省も活かし、降雪量が少なかった場合の高齢者の見守り活動といった別の取り組みが必要になってくる。

❸ 年間スケジュール

月	企　画	概　要
6	建学祭	札幌キャンパスで行われる年に1度の最も大きなイベント。今年度私たち札幌ボランティアプロジェクトはブドウやレモンジュースの上にわたがしをのせた商品やカラフルなわたがしを販売した。
7	ラベンダー祭り	札幌ボランティアプロジェクトが主催する一大イベント。ラベンダーを見に今年度は1000人以上の方にお越しいただいた。私たちもスタンプラリーや無料でわたがしを配るなどをして大盛況だった。
8	藻岩夏祭り	今年で第50回を迎えた南区の藻南公園で開催されるお祭り。私たちはテント設営やパークゴルフ、ストラックアウト、ビンゴ大会のサポート・裏方として運営補助のボランティアをさせていただいた。
11	除雪出陣式	毎年除雪を行う前に開かれる出陣式。札幌キャンパス長の網野教授からの激励の言葉をいただき、土木センターの方から除雪道具を貸与していただいた。当日はテレビカメラも入り取材を受けた。
12	みんなで遊ぼうよ	キャンパス近くの南沢地区の子どもたちと昔遊びや的当て、ボウリングなどのゲームで遊ぶイベント。南沢地域の青少年育成委員会から依頼を受けて参加し、主にゲームコーナー運営の補助を行った。
12〜	除雪	札幌ボランティアプロジェクトのメインの活動。大学周辺で生活していて除雪を必要としている高齢者の方々を対象にした活動で、本年度は例年に比べ降雪量が少なくそれほど多く活動ができなかった。
1	定山渓ウィンターキャンプフェスティバル（ボランティア）	札幌市定山渓自然の村で行われた、雪遊びやアイス作りなどの様々な体験ができるイベントにボランティアとして参加した。担当に分かれて各ブースの運営を行うとともに、最後に行われた抽選会の補助を行った。



▶ ラベンダー祭り



▶ 藻岩夏祭り



▶ 除雪出陣式



▶ ウィンターキャンプ

❹ 協力団体

旭台町内会、軟石や、公益財団法人さっぽろ青少年女性活動協会、藻岩地区町内会連合会、南区土木センター

❺ メディア掲載・放映

7/17 NHK「ほっとニュース北海道」（TV）、11/28 HBC「今日ドキ！」（TV）、12/10 北海道新聞（新聞）

ユニークプロジェクト／ものつくり館

ユニークプロジェクト活動報告

校舎	プロジェクト名称	
湘南	きらきら実験教室	マイクロコンピュータを用いた電子工作キットを企画・開発し、実施することで、子どもたちや地域の方々の理科に対する興味・関心を引き出す。
	古代文明探求会 (旧:アーカイブレリック)	遺物整理や勉強会などでインプットした知識を様々な形でアウトプットする
	ポリヘドロン工作隊	多面体工作を通して、多くの人に科学への好奇心をもってもらえるよう、科学館や「科学の祭典」など各種イベントへ出展し、イベントを成功させる。
	東海魅力宅配便	大学生活や海外研修航海での経験や学びを他学生への発信・共有していくことで、より多くの学生に東海大学の魅力を知ってもらう
	Connect	学科、資格課程で得た主に社会教育に関する知識を生かして東海大学近隣の地域の幅広い年齢層に貢献し、知識を生かし自ら考え実践する力を得る。
	★KENKO SHOKUIKU PROJECT	学食改善に向けて企画運営。1年目はKENKOランチ総選挙を企画して、選ばれた献立を学食に提案できるようにする。
高輪	ロボP	情報通信技術を元にロボットやアプリケーション、オリジナルのハードウェアを題材にした、ものづくりを体験できるプログラミング実習や地域交流を通じて地域を活性化させる。
	NSテクノロジーズ	大会や社会貢献イベントを通じて、4つの力とこれから必要とされるハードウェアとソフトウェアの両方の技術を偏りなく身に付け、社会で必要とされる技術力を体得する
清水	ワンダフル・ マリンアニマルズ	ゴミを再利用した生物ロボットを使い、環境問題と生物の面白さを多くの人に伝え、興味を持ってもらい考えるきっかけを作る。昨年度までの活動を発展させ、新しいロボットの作製とテーマをきめた解説に挑戦し、よりわかりやすく、より多くの人に伝えることを目指す。
	三保活性化プロジェクト	イベント・ボランティアの活動を通し、幅広い年齢層との交流を深め三保を活性化させる。
	商品開発プロジェクト	試作からマーケティングまでの商品開発で行う一連のサイクルを習得すると共に、自分たちの活動が地域に貢献することを実体験する。
	Shark Amazing Project	サメの資源的価値を見出し、地域のみならず全国に情報を発信する。
	★海中美化プロジェクト	三保の海を中心に海中状況の調査及び清掃活動を行い、地域の方々に知ってもらう。
熊本	阿蘇復興への道	震災を知らない人たちの防災意識を高め、当時の生活や地震のことを学び、南阿蘇の復興を支援し、南阿蘇の人たちを元気にして笑顔にする
	動植物園プロジェクト	市民の方に動物と人間の関係性を今一度見直してもらうことで、持続的な社会や産業とはどのようなものであるかを考え直してもらう。
	熊本地域プロデュースプロジェクト	阿蘇地域、球磨村などの過疎化、高齢化の問題を地域でのイベント開催やフリーペーパーによる情報発信での解決することが目的とする。広報方法の精査、受け身の姿勢から積極的な姿勢への人材を育成する。
	阿蘇環境プロジェクト	阿蘇を源流とする白川水系上流域の水質調査を行い、その結果を報告する。阿蘇地域の生態系について調査し、その結果を報告する。
札幌	地域連携プロジェクト	札幌市南区の魅力を、内だけでなく外に向け広く発信し、足を運んでもらえるようなまちづくりを目指し、今までの方法に縛られた活動ではなく、今の時代に合わせてより良い方法を模索・提案し合い、意欲的に挑戦していく。
	ビオトープをつくろう会	ビオトープにおける自然環境の維持管理とエゾサンショウウオの産卵を目指す。
	しきおりプロジェクト	今年も1年間観察を行い、生息する動植物を記録する。また、身近な自然の貴重さを知ってもらう情報の発信の場を整える。

★…新規プロジェクト

ものつくり館訪問団体

日付	団体名	人数	担当
4月25日	UAE政府スカラシップオフィス代表団	5名	国際教育センター
6月12日	米国10大学国際教育担当スタッフ	10名	グローバル推進室
6月24日	インドネシア留学生	10名	グローバル推進室
7月 4日	ブラジル留学生	20名	グローバル推進室
7月22日	県央八市議会議長連絡協議会研修会	15名	地域連携課
7月23日	茨城県大子町(自治体の方)	3名	地域連携課
9月12日	日本インダストリアル協会	10名	電気電子工学科 木村英樹教授
11月 6日	付属仰星高等学校	8名	教育支援センター
11月14日	平塚市立大野中学校	4名	入試広報課
2月26日	秦野市立鶴巻中学校	120名	地域連携課



▶ 付属仰星高等学校訪問

チャレンジセンターの活動

「2019年度チャレンジプロジェクト中間報告会・チャレンジフェア」を開催

場所:湘南校舎14号館　日時:10月19日

本キャンパスで同日に開催した「TOKAIグローカルフェスタ2019」の一環として「チャレンジプロジェクト中間報告会」と「チャレンジフェア」を実施しました。
「チャレンジプロジェクト中間報告会」では、ものつくり、国際交流、社会貢献、地域活性、環境・動植物保護の分野で活躍する20のチャレンジプロジェクトが集い、4月～9月までの上半期におけるそれぞれの活動実績や今後の目標などを報告しました。
「チャレンジフェア」では、湘南校舎の14プロジェクトが体験型企画ブースを出展。ステージでは、「DAN DAN DANCE & SPORTSプロジェクト」が「It's a show time!」と題してオリジナルのダンスを披露。「キャンパスストリートプロジェクト」は地域ならではの味を楽しむ"食"と学生や教職員、地域で活動する音楽団体のパフォーマンスによる"音"とをコラボレーションさせた地域交流イベント「TOKAI音食WEEK」を噴水前で開催。「Tokai Formula Club」は学生フォーミュラ大会に参戦(総合7位獲得)したマシンの展示とデモ走行を行い、2号館の前では「ライトパワープロジェクト」がソーラーカーや人力飛行機を展示するなど、各プロジェクトのブースは多くの親子連れでにぎわいました。

第22回チャレンジセンターセミナーを開催

場所:湘南校舎8号館　日時:12月10日

社会に生かせる「4つの力(自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力)」をテーマとした「4つの力　強化セミナー」を開催。各キャンパスをテレビ会議システムで接続し、学生や教職員ら約150名が聴講しました。
講師として設計・開発・研究を中心にしたものづくりとコンサルティングを行う(株)VSNの細見篤氏が登壇し、4つの力の身につけ方について解説しました。また、プロジェクト活動を円滑に進めるために必要なこととして、「計画と役割分担」「報告・連絡・相談の徹底」「プレゼンテーション能力」「問題解決能力」「世代交代の引継ぎ」などを挙げ、問題解決の道筋を決めるロジックツリーの考え方について学生との意見交換を通じて説明されました。

第23回チャレンジセンターセミナーを開催

場所湘南校舎8号館　日時:2020年1月10日

「国内初!民間単独での宇宙到達　ロケット開発」をテーマに、2016年に本学工学部航空宇宙工学科を卒業し、昨年5月に日本の民間企業単独として初の宇宙到達ロケットを開発したインターステラテクノロジズ株式会社(IST)に勤務する植松千春氏が講師として登壇。学生時代に所属していた本センター「東海大学学生ロケットプロジェクト(TSRP)」での経験談や夢を持つことの大切さなどについて語りました。
最後には学生たちに向けて、「学生のときから興味を持ったものにたくさんチャレンジをすることが大切です。チャレンジプロジェクトにはたくさんの挑戦する場が整っており、かけがえのない経験をすることができます。自分の力を出し切れるフィールドを選び、これからも努力を続けてください」とメッセージを送りました。

第24回チャレンジセンターセミナーを開催

場所:湘南校舎2号館大ホール　日時:2020年1月29日

日本で初開催されたラグビーワールドカップで日本代表のキャプテンを務め、チームを初のベスト8に導いたリーチマイケル選手(体育学部競技スポーツ学科2010年度卒・ジャパンラグビートップリーグ・東芝ブレイブルーパス所属)を講師に招き、「『ONE TEAM』の精神から学ぶ」を開催しました。
セミナーにはラグビーフットボール部の木村季由監督(体育学部競技スポーツ学科教授)も登壇。ラグビージャーナリストの村上晃一氏がファシリテーターを務め、学生や教職員、地域住民ら約1800名が参加しました。
2号館大ホールは立ち見も出る盛況ぶりで、急遽小ホールも使用しました。また、当日はテレビ会議システムを使って全国の6つのキャンパスにもライブ配信しました。リーチ選手は東海大学での思い出やW杯でのチームづくりや試合への備えなどさまざまな話を紹介し、最後に後輩たちに向けて、「勉強もスポーツもできる環境があり、さまざまな種目の優れた選手と付き合えた幸せな4年間でした。W杯に出て、あらためて東海大で学んだことがたくさんあると気づきました。これからの人生、失敗も成功も必ずありますが、恐れずにやっていきましょう」とエールを送りました。

「2019年度チャレンジセンター最終報告会」を開催

場所:湘南校舎8号館　日時:2020年2月5日

20プロジェクトの代表メンバーが、地域の方々や学生、教職員を対象に、全国各地で展開したものづくり、国際交流、社会貢献、環境、動植物保護、地域活性などさまざまな分野の活動から得た成果や学びについて報告しました。当日は全国のキャンパスをテレビ会議システムで接続し、全体で約600名が来場。
山田清志学長より、「報告会は、皆さんの活動が社会にどれだけ貢献できているかを証明する機会でもあるので、各キャンパスそれぞれの活動の成果をしっかり発表してください」という挨拶の後、各プロジェクトを代表する発表者が登壇し、それぞれの活動について写真やテキスト、図表を用いて紹介。学内外のイベントや大会で得た成果や気づきを振り返り、今後の課題や目標を発表しました。
プレゼンテーション終了後には、山田清志学長のほか、審査員を務めた本学連合後援会の二重作昌明会長、本学同窓会東京ブロックの宮原孝夫会長、株式会社高見沢サイバネティックス取締役の髙橋利明氏、株式会社アビストの柳澤宏美氏、株式会社和光ケミカルの小寺義昭氏、本学現代教養センターの成川忠之所長と千葉雅史次長、本センターの岡田工センター長が、各プロジェクトの発表や活動内容を審査しました。上位3つのプロジェクトに贈られる「グッドプレゼンテーション賞」は、1位に「キャンパスストリートプロジェクト」、2位に「ライトパワープロジェクト」、3位に「Tokai International Communication Club」が選ばれ、岡田センター長が代表者に賞状を手渡しました。

2019年度チャレンジセンター長賞受賞者

No.	校舎	プロジェクト名	氏　名	リーダー年度
1	湘南	スポーツ社会貢献プロジェクト	相澤さやか	2018年度
2		キャンパスストリートプロジェクト	泰江有人	2018年度
3		Tokai Formula Club	月村雄太	2018年度
4		ライトパワープロジェクト	長田達也	2018年度
5		東海大学学生ロケットプロジェクト	渡邉琴巴	2019年度
6		Tokai International Communication Club	寺脇あずさ	2017年度
7		3.11生活復興支援プロジェクト	杉山愛	2017年度
8		DAN DAN DANCE & SPORTSプロジェクト	林瑞葵	2018年度
9	高輪	Takanawa共育プロジェクト	鈴木充	2018年度
10	熊本	先端技術コミュニティACOT	林田悠里	2018年度
11		メカトロマイスタープロジェクト	新山友宏	2018年度
12		阿蘇は箱舟プロジェクト	古賀存	2018年度
13		あにまるれすきゅープロジェクト	新田裕之	2018年度

＊認定条件
1.チャレンジプロジェクトに加入して2年以上活動した者(継続していなくても構わない)
2.プロジェクトリーダーを務めた経験がある者
3.修了認定を2回以上受けている者
4.卒業が決定している者



▶ 2019年度チャレンジセンター長賞受賞者集合写真














東海大学チャレンジセンター

〒259-1292 神奈川県平塚市北金目 4-1-1

TEL：0463-50-2504（直）
FAX：0463-50-2472
MAIL：challenge@tsc.u-tokai.ac.jp
URL：http://www.u-tokai.ac.jp/challenge/